

ラブ&ヘイト

阿門 遊

第一章 天使の部屋

この俺は、見習い天使。まだ、名はない。見習いだからと言って他の天使と違う所はない。全く見た目は同じだ。白い布と頭には金色のわか。それに、背中の羽。一目了然で、天使とわかる。だが、姿、形が、天使だからといって、人に、幸せを与えられるわけじゃない。それは、年に一度の、サンタクロースにまかしておけばいい。俺の仕事は、いたずらをする事。それも、椅子の下に画鋏を置いたり、立っている人に指で浣腸したり、ひざの裏に膝を押しあててがくんとさせるようなことではない。また、大人に芽生える中学生に、誰誰さんが誰誰さんを好きなんだと噂をまき散らし、面白くはやし立てることもない。いやに、リアルなことを言っている。そりゃそうだ。今、言ったことは、全部、これまで俺がしてきたことだからな。確かに、俺はたいしたことはしていない。

今回は、こんな低俗（どうだ、自分で自分を卑下しているぞ。たいした者だ。天使だろうが、天使の見習いだろうが、人間だろうが、何事に対しても謙虚じゃなきゃいけない）ないたずらじゃない。今まで、天使のくせに遊び呆けてきた（天使だからこそ遊び呆けられたのだが）この俺に、大天使様が、過去を悔い改めて、まっとうな天使になるよう、仕事・指令を命じてきたわけだ。この、仕事の内容は、四組の人を助けてやること。そして、その四組が、心から、天使、この俺に、感謝するようになること、を求めてきたわけだ。このいきさつはこうだ。

ある日のことだ。ある日はいつだって？天使ってのは、永遠の生き物（？）だから、人間のよう、年月日や曜日、時間に対して関心はない。つまり、どうでもいいのだ。今が勝負であり、今が休息の時間である。だから、ある日はある日であって、この日でもあり、その日でもあり、どの日でもある。とりあえず「あいうえお」順で、ある日にしておこう。

俺は、大天使様に呼ばれた。天使は、ふわふわ漂っているわけだから、家なんかいらなくても、大天使様になると、ちゃんと自分の部屋を持つようになる。俺はその部屋に呼ばれた。部屋をノックする。

「入れ」

いつ聞いても威厳のある声だ。羽根の重さに耐えかねて、やや丸まった背中也鉄筋コンクリートが流し込まれたように背筋が伸びる。もちろん、生コンをかきまわす音はしていない。俺は二つ返事で、「はい」と答える。俺の前には、大天使様が特製の椅子に深々と座っている。壁は真っ白、床も真っ白、ついで見上げると、天井も真っ白。真っ白な六面体の部屋に、真っ白な服を着た大天使様が座っている。その中に、少し心が灰色に染まっている見習い天使の俺がいる。大天使様が発する光があまりにもまぶし過ぎて姿がわからない。だが、俺も、いつかは、あの椅子に座れるのだろうか。あの大天使様のように神々しくなれるのだろうか。淡い期待は、空気のように透明だ。

「よく来たな、見習い」

そう、冒頭でも説明したように、俺にはまだ名前がない。だから、他の天使からは、見習いと呼ばれている。俺以外にだって、見習いはたくさんいる。だから、他の天使が「おーい、見習い」と呼べば、一斉に「はい」と答えなければならない。それだけ、見習いには一人としての天使

各がないわけだ。十把、百把、千把ひとかけらの一つでしかない。黙ったままの俺に対し、大天使様はグラスを口にしている。何を飲んでいるのだろうか？

話は変わるが、天使の喰い物って知っているかい？人間のよう、牛や豚、鶏、そして、魚などの動物や、キャベツに、ニンジン、レタスに、カボチャなど野菜を食べるわけじゃない。人間の、俺たち天使に対する感謝の気持ちが、栄養素になるわけだ。人間の笑顔が、ほころんだ顔が、握りしめる手が、天使の生きるパワーになるんだ。なんて肯定的、前向きな食べ物だ。能力開発セミナーの主催者が聞いたら、必ず、天使を講師として採用するだろう。でも、一体、誰がそんなことを思いついたんだ。俺なら、反対に、人間の困った顔や、どうすることもできない怒り、失望のあまり泣き崩れた体、そんな人間の姿を見て楽しむ方が、いくらでも元気になれるし、明日からも、いたずらをするために、生きて行こうという気になるはずだが。

まあ、いくらここで、俺が不平不満を言おうとも、神様と天使との契約で、こうなったわけだから、仕方がない。だが、神様って誰だ？生まれてこの方、他の天使や天使を束ねる大天使様にはお会いしたことがあるが、神様なんて影さえ拝んだことがない。俺たち天使も、空高く飛べるが、神様は、それこそ雲の上の存在で、俺のような下っ端の見習い天使なんか相手にもしてもらえない。やっぱり、背中に羽があるのかな？俺の羽よりも大きいのかな。大天使様の羽は触ったことがある。翅の大きさは、俺の二倍以上ある。それに、つやつやして、光輝いている。並みの人間なら、怖れ多くて、顔をあげられないだろう。この俺だって、同じ天使（まだ見習い中）だけれど、大天使様の前では、思わず膝まづいてしまう。以前、お叱りを受けた時には、

「もういいだろう、少しは、反省したか」

と諭されて、大天使様の肩をもんだことがある。

「大天使様も、大変お疲れですね」

大天使様の肩は怒り肩であったため、俺はそれこそ一生懸命揉んだ。俺を叱って、気持が高ぶっていた大天使様だったが、俺の骨身を惜しむ献身的な行為に、心を打たれたのか、次第に、落ち着きを取り戻し、それにつれてなで肩になっていく。

「ありがとう。お前のお陰で、肩こりも大分増しになってきたようだ」

「いえいえ、大天使様のお役に立てさせていただきます、私としても、嬉しい限りです」

なんて、お世辞をかます。大天使様といっても、所詮、感情の生き物。こちらが、下手に出れば、単純に、考え方を変えてくれる。元がいい人だけに、こちらとしては、御しやすい。それだからこそ、大天使様なのだ。

「とは、言うものの、この肩コリだって、元はと言えば、お前が私を怒らせたからだ。肩も怒って硬直してしまったのだ。最後まで責任をとるのが、当たり前だろう。もっと強く揉まんか」

ギュー。

痛い。両手で頭を押さえる。俺の頭の金色のリングが閉まったのだ。このリングは、不埒な俺に、言っても直らなければ行動あるのみと、大天使様が俺の頭にとりつけやがった、いや、取り付けていただいたものだ。どこかの国の、暴れん坊も同様なリングを付けられていたらしい。どこの集団でも、母体が大きくなればなるほど、粹をはみ出す中途半端な者が出てくる。全世界、全宇宙の共通の事実であり、真実である。

と、なると、俺は、真実一号か、二号か？どうせなら、若い番号の方が箔がつく。

俺は、しばしの間、頭の中で空想の世界に遊んでいた。目覚ましてくれたのが大天使様の声だった。

「さて、見習いよ」

「はい、大天使様」

躊躇なく天使の世界に戻った俺。

「お前も、そろそろ、一人前の天使にならなければならない。わしの側で、一生、小間使いばかりではいかんだろう？」

「はい、わかっています」

と、言いながらも、口の中では舌を出す。

いた、た、た、た。金輪が閉まる。

「お前がそういう態度だから、いつまでたってもアシスタントから一人前に卒業できないのだ」

「すみません」

今度は、心から謝る。大天使様の前では、俺の心なんて全て見通せるらしい。

「このままだと、お前がなりたいという、天使どころか、墮天使になり下がってしまうぞ」

「そ、そ、それだけは、御勘弁を」

ここは、天使の国。その反対側に、墮天使の国がある。世の中、必ず、正義があれば、悪がある。地獄があれば、天国がある。右があれば、左がある。上があれば下がある。ババナがあればリンゴがある。あっ、これは関係ないか。まあ、そんなところだ。天使にも二つの世界が分かれており、聖天使の国と墮天使の国があるわけだ。生まれてからこの方、聖天使の国にいるから、墮天使の国がどんなところかは知らないけれど、伝え聞くところによると、早い話が、島流しならぬ、天使の追放の場所らしい。聖天使の国には誰も近づかない、近づこうとしない井戸があって、そこの鍵は大天使様が持っているらしい。天使にふさわしくないと烙印を押された者が、その井戸に放り込まれて、墮天使の国に落ちこちてしまうらしい。その井戸に落ちる途中で、天使の羽は、純白から真っ黒く汚されてしまい、また、羽の一枚一枚が、ぼろぼろに引き裂かれて、もう、二度と飛べなくなるらしい。後は、一生、墮天使の国を這いずり回るしかできなくなる。

そうなれば大変だ。俺が、これまで築きあげてきた人生が全て台無しになる。これから頑張れば（何に頑張るかはわからないが）大天使とはいかないまでも、中天使、小天使ぐらいにはなれるんじゃないか。人間社会で言えば、中間管理職ってことかな、ここは、俺の人生で一番の踏ん張りどころだ。

「そうだ、ここが、お前の踏ん張りどころだ」

全くもって、嫌になる。大天使様は、俺が口から言葉を発しなくても、ただ、俺が思うだけで会話になってしまう。ただし、大天使様が何をお考えになっているのかは、こちらにわからない。これじゃあ、会話じゃなくて、俺が、ただ単に、自白を強要されているだけだ。個人情報の違法なる取得だ。

「お前は、何か勘違いをしているな」

そら、来た。

「勘違いといいますと・・・」

「私は、別に、他人の心を読める能力があるわけではない」

「でも、私が思っていること全てが、大天使様の口から発せられています」

「それは、私が、お前と同じ経験をしてきたから、お前の気持ちが分かるだけで、決して、心を読んでいるわけではない」

「と、といいますと・・・」

「私も、昔、天使界では、落ちこぼれの見習い天使であった。当時の、大天使様から、このままだと墮天使になってしまうぞと注意を受け、そこから這い上がったわけだ。お前を見ていると、昔の私にそっくりだ」

へえ、大天使様も、昔、俺と同じように、落ちこぼれの見習い天使だったとは初耳だ。あまりに遠すぎて、こんなに近づいて、打ち解けた会話をするのは初めてだからな。

「はい、わかりました。今日から、心を入れ替え、見習い天使から、真の天使になるよう、頑張ります」

左胸に付けた黄色と緑色の天使の初心者マークを自信たっぷりに右手のグーで叩く。

「そうだ、その意気込みだ。ただ、その初心者マークを外すためには、試験があるぞ」

「試験ですか？」

最近、物覚えが極端に悪くなっている。天使憲法、天使民法、天使商法、どの問題がでるのだろうか。

「なあに、何にも、難しいことはない。天使憲法の前段を答えろとか、天使憲法の第九条の改正について論議しろと言っているわけではない。たった四つの課題をこなすだけだ」

やはり、俺の心は読まれている。落ちこぼれの見習い天使から、大天使に出世したのは、この能力のお陰だろうか。

「たった四つですか」

「そうだ、ほんの四つだ。正確には、四組だ。人間界に降りて行って、四組の人間を救えばいいだけだ」

「救うとは、海や川、池で溺れている子どもたちや、大きなビル火災で、逃げ遅れてビルに取り残されているお年寄りや女性たちを救出するということですか？俺、いや、私は、夏祭りの、金魚掬いは得意なんです」

「別に、お前にスーパーマンやスパイダーマンになれと言っているわけではない。見習い天使のお前にも、自分の持ち分がある。その得意技をいかして、人を助ければよい」

俺の持ち分？落ちこぼれの、見習いの天使に何が出来ると言うのだ。だが、ここで、何もできませんとは言えない。とりあえず、従順になる。どうせ、俺の心は読まれている。

「はい、わかりました。それで、何をどうすればいいんでしょうか？」

「これだ」

大天使から渡されたのは、一冊のノート。中身をめくるが白紙だ。何も書かれていない。新品だ。近所の天使の文房具で売っている普通の天使大学ノートだ。大学ノート、なんて、懐かし

い響きだ。天使中学生、天使高校生の頃、大学という響きだけで、そのノートを使うことで、何か、大人になったような気がしたものだ。実際、自分が大学生になってしまうと、天使の社会人に比べて自分がまだまだ子供だ、幼いと痛感したものだ。じゃあ、天使の見習いとして、今の自分は？やっぱり、大天使様と比較すると、子供、ガキのような気がする。それじゃあ、俺は、永遠に、子供のままなのか？子供であり続けたいのか？成長するって、何？

「大天使様、この小学、いや、中学、いや、大学ノートをどうするんでしょうか？」

「これはな、普通のノートじゃない。このノートに二人の名前を書くと、どんなにいがみ合っても、喧嘩していても、仲良くなってしまう不思議なノートだ」

「それは、本当ですか？」

「天使が嘘をつくわけではない。通称、ラブ・ノートと呼ばれている」

「ラブ・ノート？」

まさか、まーくんのことが大好き、ゆかりは俺の命だ、なんて、ファッションホテルで、書かれるなど、生の感情が排出されたノートじゃないだろうな。俺は、もう一度、大天使に尋ねた。

「ラブ・ノートですか？」

「そうだ、ラブ・ノート」

確か、俺たち天使と仲が悪い死神も、なんとかノートを持っていると聞いたことがある。そのノートに、何時何分に、どのように死ぬかを具体的に書かれると、書かれたとおり、死んでしまうらしい。恐るべき、死のノート。その点、天使のノートは幸せだ。書かれた二人が、仲良くなるのだから、こんなに素晴らしいことはない。「仲よきことは、善きことかな」だが、それは真実か？

「そのノートには、二人の名前を書かなければならないのですか？」

「そうだ、二人の名前が必要だ」

「ひとりだと？」

「片思いになる」

うまい。大天使様、座布団十枚。いや、椅子十脚。

「それで、このラブ・ノート（自分で言いながら、少し、照れくさい）を使って何をすればいいんですか？」

「お前も知ってのとおり、この天使界から人間界を俯瞰すると、あまりにも人間関係が酷くなっている。親が、まだ、年端もいかない自分の子どもを殺したり、反対に、いい高校、いい大学、いい会社を目指せと、親が子に発破をかけるあまり、子が親を殺したり、ボケた妻を夫が殺したり、反対に、暴力的な夫に対し、妻やその子どもたちが夫殺しを凶ったりと、陰惨極まりない事件があまりにも多発している」

「はい、おっしゃるとおりです」

いくら、のほほんとして天使の見習いをしている俺でも、昨今の、人間たちの行動は理解しがたいものがある。モグラたたきの行動パターンだ。ゲーム機の目の前にモグラが穴から飛び出してくるとトンカチで頭を叩く。ゲームは敏捷性を競うものだが、人間関係も同様に応用・活用しているのか、相手が馬鹿と言えどもこちらがアホとやり返す。こちらが右頬を叩けば、相手は左足の向

こうずねを蹴る。思考することなく、その場の瞬間的な感情だけで動いているとしか思えない。もちろん、百パーセント、他人を理解できる行為なんて、ありえないのだろうが。

「そこで、このラブ・ノートを使えばよい」

「世界中の人の名をこのノートに記すのですか」

「それでは、単に落書き帳になってしまう。それに、このラブ・ノートだが、私が開発したもので、まだ、試作段階だ。実際に、その効き目があるかどうかは、私にもわからない」

そんな物を、俺に試させる気か。

「それに、もう一冊、別の目的のノートを作って、その効果も試験の予定だ。お前が協力してくれば、ありがたいんだがな。見習いのマークも取れるいいチャンスだと思うが」

大天使様が俺にカマを掛けてきた。ここで、大天使様に協力しないと、一生、見習いのままだ。

「それでしたら、喜んでやらせていただきます。いいえ、天使界のため、人間どものため、是非、やらしてください」

俺は、二つ返事で快諾した。躊躇する暇はない。失敗したところで、見習いのままだ。このまま見習いのままよりもいい。どうだ、前向きだろう。それに、一度、人間世界ってものを見てみたいという気持ちも起きた。だけど、もう一冊あるという試作品のラブ・ノートは、一体、誰に使うのだろうか？他の見習い天使なのか？興味があるところだ。ふと、俺は思った。ラブ・ノートに、わざわざ、人間の名前を書くよりも、大天使様と俺の名前を書けば好いじゃないか。そうすれば、ラブ・ノートの力で、大天使様と俺はダチとなり、ため口をはたきながら、試験なんも受けずに、見習いから正規の天使になれる。ぐっと、胸につけた初心者マークをもう一度握りしめる。

「なお、このラブ・ノートは、あくまでも人間にしか効き目がないからな」

大天使様は平然と答えられた。やはり、俺の心は読まれている。

「はい、わかりました」

「また、このノートの使い方だが、一ページに二人の名前しか書けない。三角関係や多人数の関係については、まだ、研究中だ。将来的には、民族間や宗教間の争いも、自爆テロなんていう愚かな行為も防ぐことができるはずだ。それと、まだ、このノートは試作品ということもあり、ページ数は四までだ。表紙には「ラブ・ノート」と銘打っているだろう？そこには何も書けない。白紙の四ページに四組の名前を書き、最悪な関係から脱却させ、良好な関係にまで築きなさい。最後は裏表紙だ。「終わり」と書いてあるだろう。そのページも使うな。表表紙や裏表紙を使うと、お前は聖天使どころか、墮天使行きだぞ」

大天使様の最後の言葉はきつかった。これは、必ず、守らなければならない。

「さあ、わかったのなら、早速、人間界へ行きなさい。自らの感情で苦しむ人を、このラブ・ノートで、救うのじゃ」

「はい、わかりました」

自分でも言うのもなんだが、返事だけは、大天使だ。だが、疑問が一つ浮かぶ。

「このラブ・ノートに書く四組、すなわち、助ける基準は何でしょうか。どういった人を、ラブ

・ノートに書けばいいんでしょうか？」

大天使様は、にっこりと笑うと、

「それを選択するのも、試験のうちのひとつだ。さあ、試験開始だ。期限は、今日中だ。それまでに、四組を助けて、天使界まで返って来い。人間世界では、今は、朝の七時だ。夜の六時まだぞ。ほら、人間界の時計を貸してやる。頑張れよ」

大天使様は、懐から時計を摂りだすと放り投げた。それを両手でキャッチする俺。確かに、時計の針は、長針が十二を指し、短針が七を指している。天使界で住んでいると、時間の感覚なんてない。人間は、こんな便利なものを持っているかと感心すると同時に、時間に追い回されてしまうじゃないのかとも思う。大天使様に振り回される今の俺のように。

「何か、言ったか」

「いえ、いえ、何も」

大天使様の前では、何も考えてはいけない。ひたすら従順にしないと。俺は、その時計を左手首に付ける。

「六時を過ぎても帰って来られない場合はどうなるんでしょうか？」

「いつまでもお前を待っていてもいいが、私は時間外勤務となる。大天使の時間外単価は高いぞ。お前にそれが払えるか」

大天使様も、サラリーマンか。部下の熱い仕事に応えてくれないのか。

「さあ、わかったら、さっさと行け」

「ははは、はい」

俺は平伏する。

「ちょっと待て。言い忘れたことがあった。お前が一組ずつ成功する度に、東の空に文字が浮かび上がるようになっている。私はそれを見て、お前の仕事の進捗具合がわかるわけだ。仕事が遅ければこうだ」

「い、た、たたたたあっ」

俺は頭を押さえた。金のリングが閉まった。俺は、働かなければ尻や背中を叩かれる牛や馬並みだ。やはり、早く、見習いから脱出しないとイケない。

「そうだ、そうだ、その意気だ。その意気込みが萎えないうちに、やっしまえ」

大天使様の大声の勢いに突き飛ばされるかのように、俺は、天使界を後にした。でも、大天使様がおっしゃった文字とは何だろう？

第二章 墮天使の部屋

ここは、いまはやりのLEDではなく、定期的に、だが不連続に点いたり消えたりする蛍光灯が点った場末のバーのような部屋。部屋の壁は黒。床も黒。おまけに天井も黒。六面体全てが黒の部屋。その部屋の中には、グラスを片手に、何をするわけでもなく、うつろな焦点で、天井を見ながら、ベッドに寝転がっている老人が一人。その傍らでは、ぞうきんやチリトリ、箒を持って、ちょこまか、ちょこまかと掃除をしている若者が一人いた。

「おい、見習い。もうそんなことはしなくていい。早く、ここに座って、酒でも飲め」

「はい。墮天使様。でも、このテーブルの上を拭いたら、掃除は終わりです」

「そんなに一生懸命しなくていいぞ。どうせ、汚れるんだ。適当にやっておけ」

「はい。でも、最後まできちんとやらないと気持ちが悪いです」

「だから、お前はいつまでたっても、見習い墮天使のままなんだ」

「すみません」

見習いと呼ばれた男は工事現場の看板に描いてある責任者代理のように頭を下げた。

「まあ、いい。他人に何かを説教するなんて、わしの柄じゃない。お前の好きなようにすればいい」

「はい。ありがとうございます。墮天使様」

見習いと呼ばれた男は、引き続き、ちょこまか、ちょこまかと、部屋の掃除を続けていた。ある程度、片付けが終わり、

「墮天使様、お酒のお代わりはどうしましょうか？」

「おお、よく気がつくな。もう、一杯もらおうか。いやいや、そこがお前の悪いところじゃ。酒なんか、ほっといても、飲みたきゃ飲む。わしに、気なんか使わんでもいいんじゃない」

「はい、すみません。墮天使様」

「それに、わしに様なんつけなくてもいい。様なんて呼ばれたら、背中がこそばくなってしまわない。墮天使で十分じゃ」

「それなら、背中でもお搔きしましょうか、墮天使様？」

「もうええわ」

すると、今まで、ベッドに寝転がっていた墮天使が急に置き上がった。

「お前も、ここでずっといるから、変な気ばかり使うんじゃない。よし、お前に暇をやる。一度、下界に降りてこい」

見習いは、墮天使の前で、正座をした。師匠の前で、棒立ちだなんて、見習いとして許されないからだ。

「地上ですか？」

「そうじゃ、人間界じゃ」

「地上に降りて、何をすればいいのですか」

「それを考えるのが、お前の仕事じゃ、お前、墮天使になりたいんだろ？」

「はあ」

「何と、気の悪い返事じゃ。それが、お前が、相変わらず見習いのままの原因なんじゃ。と、言いながら、わしも、それでいいと思っているがな」

「ありがとうございます」

「礼はいらん。だが、いつまでも、お前を見習いのままにしておくわけにはいかん。お前も、いつかは、わしの後を継いで、墮天使になるんじゃ」

「はあ」

見習いは、別に、墮天使になりたいなんて思わなかった。このまま、見習いで、墮天使様の世話をして、一日、一生を送ることができればいいと思っていた。

「その向上心のなさが、いけないんじゃ」

見習いはびくっとした。心の中を読まれている。

「すいません」

「まあ、わしも、お前に説教するほど、偉いわけじゃないけどな。とにかく、下界に、人間界に降りて、修行してこい。修行と言う名の遊び。いたずらをしてこい。そして、立派な墮天使になるんじゃ」

「はあ」

「さあ、正坐なんかやめて、立ち上がれ。わしが、これからお前に課題を与える。この課題はクリアすれば、お前は立派な墮天使じゃ」

「はあ」

相変わらず、正坐姿の見習い墮天使。

「地上に降りて、人間界に入れ。そして、仲のよさそうな二人、親友の仲を、お前の甘言を弄して引き裂いてこい」

「はあ」

「一組じゃ試練にならんから二組、三組、うーん、四組かな。もう、考えるのがめんどうくさいから、四組でええわ」

「はあ。でも、どうやって友だちの仲を引き裂くのですか。また、友だちの仲を引き裂くのは、あまり、よくないことだと思います」

「何べんも言うようじゃが、だから、お前は見習いのままなんじゃ。人間どもの仲を引き裂くんなんて簡単なものじゃ。それに、それくらいできなくてどうする、墮天使の名がすたるぞ。まあ、そんなこともどうでもいいけどな」

見習いは、墮天使に出世したいなんて思わなかったが、師匠がどうしても、と言うので、従うことにした。

「ああ、いいものがあったのを思い出した。そこのカウンターの本棚に一番下に、ノートがあるだろう」

見習いは、さっと動いた。この本の塊は、師匠の大事な物だから、片づけはしていなかった。その積み重ねられた書物の中から一冊のノートを取り出した。まだ使っていないので、古びてはいない。

「このノートですか？」

「そうだ。わしが、昔、見習いから墮天使になる時に、同じ課題をこなすために作った物だ、何しろ、わしは、無口で、うまく言葉をしゃべれないからな。実際は、このノートを使わず、ほっといても、課題はクリアできたけれどな」

「はあ。このノートをどう使うんですか？」

見習いは、ノートを大事そうに胸に抱いた。

「何、簡単じゃ。仲の良い二人に名前を聞いて、このノートに書き記せば、友人同士が喧嘩するわけじゃ」

「はあ。名前を聞いて、このノートに書けばいいんですね」

「そうじゃ、簡単だろう」

「どんなふうにして、名前を聞きだせばいいんですか？」

「そんなの簡単じゃ。女性ならば、きれいだと、可愛いだとか、モデルさんですか、女優さんですねとか、おだてあげて、ぜひ、サインをくださいなんて言って、名前を聞きだせばいい。男性ならば、いかにも知り合いのようなふりをして、適当な名前を言えば、違うと言って、本名を言うはずだ」

「わかりました」

見習いは、ノートをパラパラとめくった。白いページが四枚程度あった。

「まあ、そのノートを使わなくても、うまくいくはずだけどな」

「はあ」

見習いは、自信なさそうな返事をした。

「まあ、とにかく、やってみろ。うまくいかなかったら、うまくいかなかった時のことだ。そのまま、一生、見習いのままでもいいぞ」

見習いは、墮天使の最後の言葉聞いて、少しは安心した。

「駄目でもいいんだ」

その言葉を繰り返し呟きながら、見習いは墮天使様の部屋を出ようとした。すると、墮天使が声を掛けた。

「ああ、言い忘れたことがあった。仲のよい二人を喧嘩別れさせることに成功すれば、西の空に文字が浮かぶからな。その四文字が揃ったら、お前の仕事は完了だ。その言葉を覚えておいて、わしに報告してくれ」

「その四文字とは、何ですか？」

「それを探してくるのが、お前の試練じゃ。先に答えを教えるはいかんだろう」

「わかりました」

「そうじゃ。それに、試練には、期限が必要じゃ。まあ、今日一日の期限をやる。それでやってみろ」

「一日ですか？」

「うまくいけば、一時間もかからないだろう。まあ、とにかく、出来ても出来なくても、どうでもいいから、一日立ったら帰ってこい。頑張れよ」

師匠から、励ましのよう、慰めの言葉を受け、見習い墮天使は、黒部屋を出ると地上

へと降り立っていった。

第三章 天使へのステップ I

俺は、背中の羽をゆっくりと羽ばたかせながら、地上三百メートルの高さから、行き交う人々を眺めている。

「さあ、誰から、助けたものかな」

空から地上を見下ろすと、人間同士、関係性を否定するかのよう、互いに、無視しながら歩いている。誰も他人を避けながら、誰も他人の存在を否定している。ある意味において、こうした方が、互いを憎み合うこともなく、幸せで良好な関係を保てるのかもしれない。だけど、一旦、地震や火事、車の衝突事故など、災害が起こった場合、みんな自分ことが精一杯で、例えば、道にじいさんが倒れていても、満員電車で老婆が這いつくばっていても、知らん顔なのだろう。

あいさつをすることもなく、人を柱や石ころなど障害物のようにして避けて歩くのだ。避けることで、自分だけは難をのがれる。しかし、いつまでも避け続けることはできないだろう。その時に、普段から、関係しあうことを拒否してきた人間は、自分だけが正しいと相手を真っ向から否定し、衝突せざるをえないのではないか。俺は、さわやかな風に吹かれながら、地上のゴミどもを眺めている。

「誰か、いい人いないかな。誰か、いい人いないかな。誰か、いい人いないかな。誰か、いい人いないかな」

俺は、思わずリズムや音符をつけて、四回くちずさんだ。だが、本当はそんな余裕はない。大天使様からの課題を今日中に片づけないと、それこそ墮天使だ。まさか、墮天使の世界でも、大墮天使、中墮天使、小墮天使、はてまた見習墮天使がいるのかなあ。多分、どこの組織でも、縦関係・階級制度はあるから、きっと、墮天使の世界に行けば、また、見習から始めなければならないのだろう。

トイレから始まり、風呂、玄関前など、新人はいつも掃除から始まる。トイレの墮天使か。社長が率先してトイレ掃除をすることで、大会社になったところもあるらしい。だが、また、一から初心者を作り直すのは、勘弁してくれだ。でも、待てよ。このまま、墮天使の世界に落ちても、墮天使でも使い物にならなかつたら、どうなるのだろうか？ひっくり返って、天使の世界に戻れるんじゃないだろうか。

それなら、安心して、今回のテストを受けられる。もし、四組の人間を幸せにできなくて、天使の世界を追放されても、墮天使の世界で、例えば、人を不幸に導く、アンハッピーノートか何かがあって、その試験に合格できずに、「お前なんか、天使の国に帰ってしまえ」なんて、都合のいい展開はないだろうか。

だが、それなら、これまでも、墮天使の国から天使の国に戻ってきた奴がいるはずだが、そんな話を聞いたことはない。やはり、墮天使の国で通用しない奴は、それより以下の世界に落ちるのだろうか。だけど、そんな心配ばかりをしても始まらない。兎に角、今、俺は、天使の国の崖っぷちに突っ立っている。下を覗けば、墮天使の国だ。ここで、力の限りを発揮して、一世一代の大仕事に取り組まなければならない。

と、まあ、いつものとおり、掛け声だけは大きいけれど。さあ、獲物はどこかな。あれ、あの

駅前に佇んでいる女の子はどうだろうか？駅から出て来た人にフリーペーパーを配っているが、誰も受け取ろうとしていない。腕には、山抱え程の冊子と、足元にもビニールのひもでくくられた束。朝の通勤・通学客はほとんどいない。このまま、一日、立ちんぼうかな、よし、近づいてみよう。

「あーあ、ほんと、やんなっちゃう。まだ、こんなに配らないといけない」

洋子は、重くのしかかる無料の求人情報誌をうらめしそうに見つめる。名前はフリーなのにノルマがあるため、全然自由にはならない。朝の七時から配り出したが、人の一番多いピークの八時から八時三十分はとうに過ぎ去っている。配り始めの頃、東の空を見ると、太陽は赤く、日の出がこんなに素晴らしいものかとかと思ったが、今は黄色く光り、まぶしいだけで、体中の力を奪う。

もう少し時間が経過すれば、頭の真上から照射され、ますます生気が失われる。さっさとやり終えないと。今日の残った仕事は、この手に抱えた求人情報誌と足元の大束。これじゃ、昼までに配り切るのは無理だ。夕方の五時以降の帰宅途中のサラリーマンやOLを再び狙うしかない。まてよ、今日は、午後からも別の情報誌を配る仕事だ。街なかの喫茶や居酒屋、美容室をPRした冊子だ。そのバイトもこの求人雑誌で見つけたものだ。あーあー、ほんと、いやになっちゃう。

同僚の純子を見る。純子は相対して、向こう側に立っている。足もとにはもう束はない、あと右手に持っている数枚だけ。純子がさっと動いた。正面玄関から出てきたおばあさん三人組の胸に押しつけるように渡すと、こちらを振り返り、手を振る。もう終わったから一旦事務所に返るとの合図。余裕の顔だ。

悔しい。今日もまた、先を越された。こちらも、求人誌を持ったまま、形式的に手を振り返す。あんなおばあさんに求人情報を渡しても、全く、意味がないだろうと思いながら、押しの強い和子に憧れたりもする。とにかく、早く、この求人誌を配り終わらないと、今日の一日の日程全てが狂ってしまう。目の前に、大きな影が見えた。お客さんだ！

「どうぞ」

洋子は、求人誌を差し出す。冊子は洋子の手から離れずに、また、影も立ち尽くしたままだ。ふと、顔を上げる。そこには、白い衣装をゆったりとはおった一人の男？女？がいた。どこかで見たことがあるような、ないような出で立ち。

「あなた、誰？同業者？」

こんなかっこうをすれば、目立って、道行く人は面白がって、求人情報誌を受け取ってくれるかもしれない。と、いうことは、アルバイト先から派遣され、状況を見に来た調査員？監督員？「まだ、こんなにたくさん残っていますけど、必ず、配り終わります。もう直ぐしたら、次の便の電車がきます。降りて来たお客さん全員に渡せば、配り終わります。完了です」

洋子は、慌てながらも、必死で、言い訳をする。今は、お客さんが一番少ない空白の時間。降りてくる客なんて、わずかだと知っている。一人当たり、十部、いや二十部、はてまた三十部程度渡さなければ、この数をはけることはできない。まさか、虫めがねを使って、燃やしてしまう

わけにもいかない。

いや、待てよ、目の前の風変りなお客さんは、マジシャンかも。今の、この私の状況を助けてくれる神様？

「か、神様、私を助けて」

洋子は、藁ではないけど神様の服を掴もうとした。

(見習い天使)

誰が、神様だって。残念だけど、俺は神様じゃない。残念だけど天使でもない。見習天使だ。だが、普通の人が見れば、神も天使も、見分けはつかないだろう。ここで、怒ったところでどうなるわけでもない。返って、初心者マークを着けた状態が長引くだけだ。笑って、笑って。

「私は、神様じゃありません。見習、いや、天使です」

胸を張って答える。天使、何ていい響きだ。早く、天使になりたあい。

(洋子)

ほらほら、いるんだよ。世の中には、こんな変な奴が。つい、困って、見知らぬ人に助けを求めたけれど、まさか、自分から天使だと言いだすとは。こんな奴に長居されたら、本当にバイトが終わらない。適当にあしらわないと。

「あらっ、ごめんなさい。あたし、神様と天使の見分けがつかなくて。今、忙しいので失礼します」

洋子は天使の羽をするりと横切り、

「週刊アルバイト情報誌、いかがですか」

と、大声を上げ、駅から出てくる人に渡そうとした。だが、乗客も洋子の側をするりとすり抜けて行く。赤い制服の洋子と白い服の見習い天使。紅白の目出たい二人だが、目立ち過ぎ変な奴と思われ、誰も相手にしてくれない。

「もう、やんなっちゃうな。天使だか、神様だか、わからないけど、あたしの邪魔をしないでくれる」

洋子は、振り向きざま、口をとがらし、俺に向かって言い放つ。

おっと、相手を助けるつもりが、相手を怒らせているぞ。

「いやいや、邪魔するなんて、そんなつもりはありませんよ。反対に、困っているあなたを手助けしたいんですよ」

見習い天使は、手を振り、否定しながら、笑顔で応える。

「とにかく、今のあなたの望みは、手に持っている求人情報誌を配り終えればいいんですよ？」

「そうよ、時間がないの。天使さん、あなた手伝ってくれるの？一人よりも二人の方がいいわ。それに、そのコスチューム、ユルキャラっぽくて、いいかも。「天使が、あなたを魅惑の仕事にお誘いします」っていう、キャッチフレーズは、どうかしら」

(見習い天使)

誰が、ユルキャラだ。どこかの地方自治体の町おこし事業じゃあるまいし、この見習い天使様

を何だと思っているのか、と、ここで怒っちゃいけない。折角の、見習い天使が、見習い墮天使に落ちこぼれちゃ、これまでの努力が水の泡だ。ここは、我慢、我慢。

その時、他の女の子が、近づいてきた。

「洋子、まだやっているの。あたし、もう終わったから、帰るわよ、バイバイ」

洋子と同じ法被を羽織っている。

「あら、この人、何？変な衣装を着ているわね。あっ、そうか、自分の仕事が終わらないから、応援頼んだんだ。でも、こんなキャラじゃ、よけいにお客さんが引いてしまうんじゃないの。洋子は、相変わらず、バイトも、友達選びも、服も、センスが悪いんだから。もし、よかったら、配るのを手伝ってあげようか」

「この人は関係ないわ。あたしに勝手に近づいてきただけよ。それに、今日は、たまたま、ハケ具合が悪いだけ。少し、早いからって、威張らないでね。お疲れ様、さっさと、帰ったら。あなたも忙しいんでしょう？あっ、求人情報誌いかがですか」

洋子は、二人を残し、目の前を通り過ぎる人に渡そうとするが、受け取ってもらえない。

「おお、怖っ、そんな顔つきや声で、誰が、受けとってもらえるかしら。あなたも、あまり洋子に関わらない方がいいよ。じゃあね、バイバイ」

「誰が、あんたなんかに手伝ってもらうもんか。それより、そこの天使さん、あたしに用がないのなら、さっさとどこかに行ってよ」

(見習い天使)

おお、怖っ。確かに、あの女が言うように、洋子の鬼瓦のような顔では、人は避けることがあっても、近づいてくることはないだろう。それよりも、自分の心配が先だ。この洋子とあのアルバイト仲間をラブラブ関係にさせることができるのか。

見習い天使は、懐から、ノートを取り出した。

大天使様がおっしゃったように、ただ単に、このノートに名前を書きだけで、あんなに仲の悪い二人が、本当に、仲良くなるのかな。まあ、何でも、やってみよう！

「あの、洋子さん」

「何、まだ、あんた、いたの？それに、洋子だなんて、馴れ馴れしく呼ばないでよ」

鬼の次は、悪魔の顔だ。お祓い、お祓い！

「見習い天使こと、私も、この地上に降りてきて、人間のあなたと、初めてお知り合いになれたのだから、是非、フルネームを教えてくださいたいのです」

「うるさいわね。でも、教えたら、この場から、いなくなってくれる？それだったら、教えてもいいわよ」

「もちろんです。是非、お願いします」

見習いかもしれないが、天使の俺が、何故、こんな、小娘に頭を下げなくてはならないんだ。と、天使の輪っかを頭からはずして、投げつけたくなかったけれど、ここは、我慢、我慢。ひたすら我慢。

「じゃあ、教えてあげる、「田中 洋子」よ。「自然に恵まれ、稲穂が実る田んぼ」の「田」に、「世界の中心は私のためにある」の「中」。それに、「世界一大きな海の太平洋」の「洋」に

、「未来が明るい子ども」の「子」。続けて、「田中 洋子」。わかった！」

すごい。自己に対する全面肯定だ。

「ありがとうございます。さらに、もうひとつお願いします。あの、さっきの彼女、純子さんって、言いましたよね。彼女のフルネームは？」

「なんで、あんな奴の名前を、あたしがあなたに言わなきゃならないの。口にするのも穢わらしい」

「そこをなんとか」

天使のわっかが見えるくらい、頭を下げる。輪かっかからは怒りの湯気が立ちあがっているはずだ。今、頭の上にやかんを置けば、チベットで鏡を使ったお湯沸かしに匹敵するほど、短時間で湯が沸くはずだ。

「じゃあ、言ってあげる。「山本 純子」。「人でなしの山族」の「山」に、「本当のことを決して言わない嘘つきの「本」に、「不純でいっぱい」の「純」、それに、「不幸でおおわれた子ども」の「子」。「山本 純子」よ。わかった、もう、二度と言わないわよ。ペッ」

田中洋子は、つばうい地面に吐き捨てた。

(見習い天使)

感心するほど他人の全面否定。俺は背中の中から抜いた羽根ペンで、二人の名前をノートに書きつけた。果たして、何らかの効果が現われるのか。

一分経過。何の兆候もない。田中洋子は、相変わらず不機嫌そうな顔で、求人雑誌を手に持ったままだ。二分経過。ただ、時計の針が動いただけだ。状況は変わらない。こうして、時間だけが、人生だけが過ぎていくのか。五分経過。やはり三分前と同じ。その場が凍りついたようだ。ただ、黙ったまま突っ立っているのは辛い。

「あんた、まだ、ここにいるの？天使だか、天井だか、知らないけれど、いいかげんに、あっちへ行っても。あんたがいると、お客さんが気味悪がって、こちらにこないじゃないの。しっしっ」

洋子は、手に持っていた冊子で、俺を犬のように追い払おうとした。もう、昼前だ。状況は、以前として、最悪。大天使様に、一杯喰わされたかもしれない。こうなりゃ、洋子が言うように、天井でも、腹一杯、食ってやろう。支払は、大天使様の、天使印のクレジットカードだ。俺をだました罪だ。文句はないだろう。

俺は、あきらめて、洋子の側を立ち去ろうとした。照りつける太陽の洋子の影を踏みつけながら。哀しいかな、天使のプライドを守るため、これが俺のささやかな逆襲だ。その時、バタバタッ、バタバタッと音がだんだんと大きくなって近づいてくる。ドップラー効果だ。俺の前方、洋子の後方から、あの不純の純子が走ってきたのだ。

「洋子、どう？まだ、仕事終わらないの？」

先ほどの、嫌味たっぷりの言いかたではない。本当に、相手を心配した声だ。

それに対して、洋子は、

「うん、まだ、これだけあるの。でも、大丈夫。なんとか、ひとりで配ってみせるわ」

こちらにも、笑顔で応える。俺にもその笑顔の皺の一部でもくれよと思いながら、状況が一変し

たと感じた。このまま様子を見てみよう。ただ、黙って二人をみる。

「そんなこと言わないで。私も、手伝ってあげるよ」

「そんな、純子に悪いわ。もともと、あたしが愚図だから、こうなっちゃったんだもの。責任は、あたしにあるの」

「そんなことはないわ。一緒に、駅前で配っているのだから、どちらとも同じに時間帯に終わらないとおかしいわ。少し、あたしが強引なだけ。洋子は、少しも愚図じゃないわ」

「ありがとう、純子」

「お礼はいいから、さあ、貸して。さっさと配り終えましょう。一人よりも二人の方が早く終わるわ」

純子は、そう言うと、洋子の足もとに積み上げられているフリーペーパーの束を体で抱えると、駅の方に走って行った。

「待って、純子。私も行くわ」

先ほどまでの関係が嘘だったかのように、二人は、仲むつまじく、手と手を取り合うように、求人情報誌を配っている。洋子も純子も互いに笑顔だ。ものの五分も立たないうちに、二人は、俺のところに戻ってきた。さっきの五分に比べて、あっという間に時間が過ぎた。同じ五分なのにこうも違うのか。

「やっと終わったね」

「ありがとう、純子。お陰で、全部配りきれたわ。午後からの、アルバイトに間に合うわ。もし、よかったら、お昼一緒にしない。お礼に驕るわ」

「いいのよ、気にしないで。お互いさまよ。今度、あたしが、もたもたして、配りきれなかったら、手伝ってね」

「いいともー」

「ホント、もう十二時ね」

二人は顔と顔を寄せ合うほど密着してここから立ち去って行く。取り残されたのは俺。

「あっ、天使さん」

洋子が振り返った。

「なんだかしらないけれど、ありがとう」

「この人、誰？」

「あたしもよく知らないけれど、天使だって」

「へえー、天使って、本当に、いたんだ。映画や小説、絵画の中だけかと思った」

「そう、天使なの」

俺は、「見習いだと」付け加えようとしたが、相手が天使だと思い込んでいるのをあえて否定しなかった。「天使」、なんていい響きだ。

「その天使が、どうしたの？何か、あったの？」

「そうじゃなくて、天使が来てくれたおかげで、純子とも仲良くなれたし、情報誌は昼前に配り終えられたわ。一天使二得よ」

「そう、洋子が、お礼を言うのなら、あたしも礼を言うわ。天使さん、ありがとう！」

二人は、仲良く腕組みをして、俺の元を去っていった。

うまくいった。ラブ・ノート之力なのか。だけど、まだラブ・ノートを信用しきれない俺。もう一度、二人の名前を書いたページをめくる。「田中 洋子」、「山本 純子」の名前が記されたままだ。消えてはいない。大天使様が空に何か字が浮かぶと言っていたのを思い出した。確か、東の空だな。

今、俺は太陽を見ている。東は、俺の左方向だ。体の向きを変える。屋根型の山が見える。山なんて、三角形だと思っていたが、この山は頂上が平べったい。頂点がない。好いように言えば、この街の人間も、誰が上でも下でもなく、今の洋子と純子と同じように、同等の関係を象徴しているのか。こんなことを考えるのは俺も天使への階段を一步上っているのかもしれない。やがては大天使様と肩を並べられるぞ。

痛っ。

金のわっかが閉まった。お調子者の俺に対する大天使様の戒めだ。平らな山の上を見る。何も浮かんでいない。大天使様のいたずらか。左の方に頭を動かす。海の方だ。何か浮かんでいる。雲？ジェット雲で書いたのか字が見える。そこには、「L」の字が浮かび上がっている。

「L」？何の綴りだろう。残り三文字だ。とりあえず、ひと組目は成功だ。残り三組。じっとしていても、獲物は見つからない。俺は、自慢の羽をはばたかせながら、空に舞い上がった。駅前広場には、石の椅子が置いてあり、荷物を持って、パンフレットを眺めている観光客や時間つぶしの背広姿の営業マン、日向ぼっこの年寄りたちが座っている。

なんら争いはない。動きもない。後ろにハンカチでも落としてやらなければ、決して動こうとはしないだろう。彼らは、ここで、日がな一日、のんびりとした一日を過ごすのか。だが、椅子と椅子との間。微妙に離れた距離はなんだろう。互いに関係性を断つことで、自分を守ろうとしているのだろうか。

第四章 墮天使へのファーストステージ

「さあ、誰から声を掛けようか」

見習い墮天使は、羽根を折り畳んだ。降り立ったのは、JR 駅前の円形の広場だった。そこは、電車やバス、タクシーのターミナルで、多くの人たちが行き交っていた。空から、見習いが降り立ったのにも関わらず、誰も、不思議に思わないのか、気付こうとしない。見習いが、こんなに数多くの人間を生で見るのは初めてだった。普段は、師匠の世話で一日が過ぎ、たまに、師匠とともに、墮天使たちの会合やパーティに参加し、空の上から、人間たちの愚かな行動を見ては、それを酒の肴にして、楽しい一夜を過ごすのだった。

空の上から見ていた人間と、側で見る人間は、少し感じが異なっていた。パーティの余興として、人間の馬鹿げたやりとりを、天空いっぱいのオーロラ画面で見るとはあったものの、間近で、すぐ触れるぐらいの距離にいるため、初めて人間を見たような気がした。やっぱり、本物は違う。人間たちが、全く環境の違う世界に住む、白クマやライオン、キリン、ゾウ、イルカ、ヘビ、トラ、カンガルーなどを無理やり一箇所に集め、もの珍しそうに眺める習慣を持つ変な趣味を、なるほどと思った。

自分たち、墮天使ならば、世界中どこにでも、瞬時に行けるので、わざわざ莫大な経費をかけ、世界中の動物たちを集めたり、できるだけ住んでいた環境を作るために、寒い地域なのに亜熱帯にしたり、温かい地域なのに、氷を浮かべたりするような施設は作らない。人間の努力、営み、野望、欲望に感心した。だが、いつまでも、口を開けたまま阿呆面をしているわけにはいかない。見習いは、本音としては、特段、今の状況から墮天使への階段を上に登りたいとは思わないけれど、墮天使様の命令だから仕方がないと思っている。わざわざ、仲が良い二人の間を切り裂くなんて、墮天使様も意地が悪い。だからこそ、墮天使なのだろうと納得するけれど、でも、墮天使様は適当にやれとおっしゃっていたから、その命令にも従おう。おっと、これが墮天使ノートか。

見習いはノートを手にする。

本当に、このノートに名前を書いただけで、仲の良い二人が喧嘩別れするのだろうか。少し、試してみたいがする。それに、墮天使様の言うとおりの、四組の人間の仲を引き裂いたら、空にどんな文字が浮かぶのだろうか。期待していないけれど、見てみたい気がする。さあ、早速、獲物を探さないと。おっ、あの二人だ。

見習い墮天使が見つけたのは、駅前で、フリーペーパーを配る二人。

見習いは決めた。あの、二人にしよう。同じ、赤色の帽子と服を着て、いかにも、仲間という感じだ。二人で、連携・協力して、冊子を渡している。中には、受け取らない客もいるけれど、お互いに励まし合って、何とか、規定の冊数を配ろうとしている。うーん、青春だ。二人には、悪いけれど、これも運命だと思ってあきらめてくれ。

墮天使見習いは二人の側に近付いた。

洋子は思う。今日の午後調子もいい。予想以上に、ハケがいい。だって、純子と二人で、共

同戦線を張っているからだ。今まで、というより、ほんのさっき、午前中の後半まで、互いに単独行動で、競争のように、敵のように冊子を配っていたけれど、今は協力態勢を組んでいる。お客さんに、「フリーペーパーいかがですか」と、いくら大きな声で叫んでも、なかなか受けとってもらえない。「どうぞ」と声を掛け、無理やり体の前に突き出しても、無視するか、突然の冊子の出現に驚き、本当は欲しいと思っても、足が急いで職場に向かおうとしているため、手を出した時には、目の前を通り過ぎていくのだ。

あたしがフリーペーパーを配るように、みんな、自分のことで忙しいのだ。そう言う時こそ、ペアの力だ。二メートル前に、純子が「こんにちは」と言って冊子を渡す。欲しい人は手を出す。必要だけど、耳に栓をして音楽を聴いたり、会社や学校までの道のりを、ひたすら修行僧のようにうつむいて歩く人には通じない。でも、そんな中でも、あたしたちの黄色い声を聞いて、心の内から外に出てきた人は、少しは関心を持って、手を伸ばしてくれる。そんなチャンスを待つ。

だが、折角、興味を持ってくれても、多人数の川の流れるとどまることができずに、冊子を受け取らず、まあいいや、いつでも手に入るわと思いき、そのまま流れてしまう。その思った数秒後に、欲しかった冊子が、声とともに再び目の前に現れる。彼女（彼）は、心の中で、ラッキーと思いつつも、声には出さずに、私を一瞥し、今度こそ、この幸せを、このチャンスを逃すものかとさっと手を出し、冊子を握りしめるのだ。

そう、私たちは、赤い服を着た、真夏のツインサンタクロースギャルなんだ。パチパチ。自画自賛。二人で、一人。昔から仲のよかった、相棒、友人、姉妹、家族なんだ。あれ、純子とこんなに親しくなったのは、いつからだろうか？ずっと、前。いや、二、三日前？いや、ほんのさっきのように思える。それまで、口なんかきいたこともなかったし、どちらかと言えば、商売敵だったはずだ。純子が一冊配るたびに、私の配る客が一人減る。早く終わらないといけないのに、時間がまた伸びてしまう。あえて言えば、純子は敵だったはずだ。

でも、時代錯誤の白い服を着た自称天使、いや天使の見習い（わたしの眼には、ピエロかちんどん屋にしか見えなかった）が、やってきて、急に、仲よくなったんだ。気持ちの変化かな。女心は全天候の空だもの。いつだって、どこだって変わっちゃう。

「もしもし」

「はい、どうぞ」

「あっ、ありがとうございます。ありがたくいただきます」

彼女の目の前には、黒いシーツのような衣服をまとった男が立っていた。どこかで見たことがある服だ。そうだ、さっきまで考えていた、あの見習い天使と同じ服の形をしている。でも、色は黒。それに、見習い天使と顔は違う。でも、仲間かなんかだろう。洋子はそう思った。

「忙しそうですね」

「ええ、これだけ配らないといけないんです」

彼女は、手に持っている冊子と、観光案内板の下にまだ積み重ねられているフリーペーパーの山を指差した。

「あっ、ごめんなさい」

彼女は、目の前を通り過ぎていくおばさんに冊子を渡そうとするが、見向きもされない。

「無料なのに、もらって貰えないんですね」

「ええ、荷物になるからと、手にフリーペーパーを持ったままだと、かつこうが悪いんですよ。以前、記念号を出した時に、手提げ袋付きで渡したら、結構、持って行ってくれましたけど」

「現金なんだ」

「そうですね」

苦笑いをする洋子。人間不思議なもので、ただでもらえるとなると、過剰なるエネルギーを平気で使う。以前、中央公園で行列ができていた。無料で、パンジーの苗がもらえるらしい。一時間以上も待つような行列。そこまで待って花の苗を貰っても、どうせ、家に帰ったら、庭に植えた後、最初は水やりをするけれど、翌日以降は、そこに花が植わっていることなんか忘れてしまい、そのうちに花は枯れてしまうのに。枯れたら枯れたで、あら、枯れちゃたの一言で終わる。あたしの人生をもてあそばさないでよ、とドスの利いた声で、裾も露わに片膝ついて、パンジーが怒りそうである。

彼らや、彼女ら、特に、高齢者の彼女らが多いけれど、ただで貰うことで、得をしたという感情だけが満たされて、飽和状態になってしまうのであろう。そのためだけに、彼ら、彼女らは、毎週末に、イベント会場を東へ西へ、南へ北へと彷徨うのだ。

と言いながら、洋子自身も、機会あるごと、懸賞やクイズに応募している。その賞品が欲しいのもあるけれど、タイムマシンに乗って未来から使者がやってくるようで、それが楽しみなのである。未来の期限付きの懸賞。それに向けて、せっせとはがきを送り、インターネットをクリックする。発送後の未来で、何らかの不思議な力（単に確率の問題であり、偶然なのであろうけれど）が働き、未来から賞品と言う名のメッセージが届く。未来との会話。この楽しみのために、彼女は、今も、懸賞やクイズに応募し続けている。彼女がそんなことを考えているのを知って知らないでか、見習い墮天使は、彼女の後ろにいるもう一人の女性に気がつく。

「彼女は誰？」

洋子は答える。

「同僚の山本純子。ホント、名前のお通り、純粋な子なの。午前中、あたしが冊子を配り終えていない時、手伝ってくれたんです」

見習いは純子と呼ばれた彼女を見た。にっこり笑い、会釈をする純子。えくぼが両頬に二つ。今なら、全ての不幸も幸せの休憩地に佇みそうである。この二人の仲を裂くことなんかできやしないし、もし、仮に、そんなことができてもしもすべきなのか、見習い墮天使は気が乗らなかった。他人の不幸で、自分が出世（見習いから正規の墮天使になるということ）するなんて、そこまでしなくてもいいんじゃないかと思った。一生、見習いのままの方が、墮天使らしくていいんじゃないだろうか。墮天使の昇進なんて、可らしいんじゃないかと思った。その時、頭の上にあったはずの、わっかが見習いの頭にすっぽりと入るや否や、ぐうーと締め始めた。

「いたたたたたたたった」

頭を抱えたまま、その場にうづくまる見習い。

「大丈夫ですか？」

洋子が心配そうに見守る。純子もだ。

「だだ、だいじょうぶです」

痛みが少し治まったので、立ち上がる見習い。空の上から墮天使様が監視しているのだ。やはり、命令は、いやでも従わなければならない。見習いは、座りこんだまま、ポケットからノートを取り出すと、ずきずき痛む頭を押さえながら、白いページに二人の名前を書いた。

「私のことはさておき、もうすぐ配り終えそうですね」

「ええ、純子と二人でやれば、午後の部の仕事もじきに終わると思います。その後、二人とも居酒屋のバイトがあるんです」

見習いは思った。やはり、この二人の仲を裂くのはやめよう。こんなに一生懸命頑張っているじゃないか。もっと他の人にすべきだ。何も、墮天使に昇格するのに期限があるわけじゃない。お師匠様が空から眺めているのはわかっているけれど、すっぺらこっぺらと言いつつ繰り返そう。墮天使様を騙すのも、修行のうちだ、そう決意すると、ノートに書いた二人の名前を消そうとした。

その瞬間。強風が吹いた。ここ駅前は、港を再開発した場所である。フェリーの汽笛が聞こえる。海はすぐ側だ。そのため、北からの風は強い。また、近くには、三十階建と十二階建のオフィスビルが二棟建っている。風は、ビルの間を通り、より強さを増し、駅前のバスやタクシーを待つ人、電車から降りてきた人、オフィスビルのビジネスマンたちを吹き襲う。

「きゃっ」「きゃっ」

洋子と純子が悲鳴を挙げた。身をよじって、顔をそむける。そむけた方向に、フリーペーパーが、ページをめくりながら飛んで行く。

「あっ、お金が、じゃなくて、アルバイトが」

すぐ側で、純子の声もした。一冊、二冊、十冊、数十冊と、フリーペーパーは自由を得たかのように、駅の広場に飛び広がった。その後を追う純子と洋子。近くに飛んだのはいいけれど、中には、一ページ目がめくれ、そのページが風に煽られ、二ページ目がめくられ、更に地面を滑る。フリーペーパーは、風車の羽根のように、海に浮かぶヨットのように地面を滑り、広場の中に自分の居場所を確保した。

中には、港の海水を引き込んだ池の近くまで吹き飛ばされている。海水の中に落ちてしまえば、商品価値はゼロだ。お客様には渡せない。純子と洋子、それに、何かの縁かも知れないと、見習い墮天使も冊子を拾う。集めて元の場所に戻しても、再び、強風により吹き飛ばされる。この繰り返した。それなら、いっそのこと、台風並みの強風が吹いて、全ての冊子を空に舞いあげ、道行く人に配って欲しいぐらいだ。そうすれば、バイトは一度に終わってしまえるのに。純子と洋子は回収しながら呟く。

やっとのことで、冊子を集め終えた二人。

「純子、これ、あなたの分でしょ」

洋子は、自分が集めた冊子の一部を純子に渡す。

「ありがとう」

札を言って受け取る純子。確かに、純子の分は元の数に戻っている。洋子は、自分の分を見た。かなりの数が減っている。誰かが持って行ったわけじゃない。まだ、回収できていないのだ。純子の後ろの地下駐輪場への階段の入り口にまで、冊子が飛んでいる。それは、純子に近い。

「ちょっと、純子。あたしは、あんたの分まで拾ってあげたのに、あなたはあたしの分は知らん顔なの」

「そんなことないけど・・・」

「そんなことあるじゃない」

頭に血が上る洋子。最初は、下手に出ていた純子も、

「いちいちうるさいわね。自分のことぐらい、自分でしなさいよ」

と言い返す。

「何、その言い方」

洋子からは髪が立たんばかりに頭から湯気がでる。この様子を見ていた見習い。

「まあ、まあ」

と仲裁にはいろいろとしたが、

「何が、ママよ、あたし、あんたの母親じゃないわ」

「そうよ、あんたなんか関係ないんだから、さっさといなくなってよ」

二人から強い口調で責められ、たじたじとなり、後ろに下がる見習い。こうして、さっきまで、仲睦まじかった洋子と純子は、元の黙阿弥、佐渡に配流となった世阿弥のように、昔の関係に戻ってしまった。二人の間には、日本海ほどではないけれど、瀬戸内海の桃太郎に出てくる鬼の伝説で有名な、女木島、男木島のように離れてしまったのだ。（これは、女木島と男木島の住民の仲が悪いという意味ではない）

「私は何もしていないのに」

見習い墮天使は少し肩を上げて、代わりに首を引っ込め、空に向けて手の平を広げた。俺は知らない、どうすることもできない、のポーズだ。洋子と純子の二人は、そそくさと荷物を片付けると、まだ、冊子を全部配り終えていないのに、広場から立ち去った。もちろん、二人とも反対方向に。純子はJRの駅の構内に、洋子は私鉄の駅の方向に。一人残された見習い墮天使。胸に抱えていたフリーペーパーを近くの人に手渡す、それこそ、自由の身となる。

「これでよかったのかなあ」

と思うと、急に、空が黒くなった。日差しの一部が隠される。生温かい風は吹かない。ここは広場。墓場じゃない。それに、墮天使と幽霊はなじまない。そう思いながら西の空を見上げる。地上に降り立つ前に空から見た時には、雲ひとつない青空だったが、今は違う。何か文字のような白い塊が浮かんでいる。

「なんだ、あれは」

眼をこらす見習い。

「あれ、あれは、アルファベットのHか？なんで、Hなんだろう。お姉ちゃんたちと会話はしたけど、やましい気持ちは持っていなかったはずだ。そりゃあ、他人から見たら、俺が、お姉ちゃんたちを口説いているように見えたかもしれないけどな。でも、相手からは、セクハラだなんて

、言われなかったぞ。それでもHかな」

見習いはいろいろ考えた。でも、答えは見つからなかった。

「きっと、次の課題をクリアすれば答えがわかるだろう。ここで考えていても仕方がない」
もちろん、自分の力で課題をクリアしたなんて思っていない。たまたま強風が吹いて来て、冊子が飛んで、自分が人を助けるために回収したら、二人の仲が悪くなっただけだ。

「風が吹いたら見習い堕天使が儲かる、そんな諺ってあったかなあ。まあ、いいか。偶然も実力のうちだ」

そう思い直し、見習いは次のターゲットを探そうとした。

第五章 天使へのステップⅡ

駅前には、この都市自慢のタワーが建っている。いわゆるシンボルタワーだ。オフィスに、レストラン街、コーヒーショップ、グッズショップ、千五百人規模の大ホールや三百人規模の小ホール、同時通訳の設備が整った国際会議場など、人が集まれるハード面は整備されているが、人と人との触れ合いはない。みんな、他人をすり抜けて生きている。最高階は三十階。レストランの中に展望室がある。見習い天使の俺は、羽をはばたかせ舞い上がる。エレベーターや非常階段なんて使わない。地上百五十メートルの屋外から非常扉をこじあけ、中に入る。そこでは、この地を訪れた観光客か、仕事に疲れたサラリーマンが、街並みをぼんやりと見つめている。

俺も、他の人間と同様に、高いところからさっきまでいた広場や道路、オフィス街を見下ろす。窓の位置を変える。北側には海が広がり、港では、対岸の島や他都市を結ぶ定期航路のフェリーなどが、頻繁に出這入りしている。その南側には、かつてお城があった公園がある。堀に海水を引き込んだ珍しいものだそうだ。先ほど、駅前の観光案内所の前で拾ったパンフレットに目を通す。

ふーん。納得するような、しないような顔さ。目をもう一度凝らす

「おっ、早速、カモじゃなく、目当ての人間がいたぞ」

俺から見えたのは、堀で餌をやっている男性。距離が遠いため、はっきりとわからないが、初老の男性だろう。

「何に餌をやっているのかな。ここは海水だから、コイじゃなくて、海の魚だな。仕事よりも、そっちが気になる。今晚のおかずになるかな。早速、近づいてみよう」

俺は、独りごとを言い終えると、再び空中に飛び出し、ホバリングしたまま、公園の餌やりおっさんの元に向かう。突風が吹く。右の羽が大きく開く。バランスが崩れる。海に近いことや、こうした高い建物のせいで、風が強くなるのだ。俺は、体を大きく傾むけたまま、公園に飛んで行った。

「回って、回って、目が回る。愛よりも、酔い止めが欲しい」

俺は、風に流される竹トンボのようにふらつきながらも、何とか公園の池の付近に降り立った。目の前では、おっさんが一人、堀に向かって餌を投げ続けている。俺は、おじさんの横に並んだ。

「何の魚に、餌をやっているんですか？」

疑問形で聞く。尋ねられた方は、振り向くことなく、ただ、ひたすら、餌をやり続けている。かなりの間があいて、返事がきた。

「鯛だよ、鯛」

「鯛ですか？」

「何だ、あんた、鯛も知らないのか？」

「いや、鯛なら知っていますけど、お城のお堀には、普通、鯉でしょう。ここの鯛は、鯉が進化したんですかねえ。きっと、池底の石臼を回し過ぎたんじゃないですか」

俺は、少し、場の雰囲気や和ませようとジョークを交えながら、池の中を覗き込む。赤い魚が

泳いでいる。確かに、鯛の形をしている。しかし、スーパーでは一匹まるごとの姿よりも、刺身となって、舟形のトレイに入れられているから、お祝い事でもない限り、全体像を見ることはまれだ。魚ってのは、最初から捌かれたままの刺身の状態で泳いでいるんじゃないかと、馬鹿げたことを考えてしまう。

「何を言っているんだい、鯉がいくら鯛に恋い焦がれても、鯉になんかんるもんか。へたに海水に飛び込めば、浸透圧の影響で、体中から水分が逃げ出し、痛い（い鯛）目に遭うだけだ」

「うまい、座布団一枚」

俺は思わず叫んだ。人間の機嫌をとるのも大変だ。

「ありがとうよ。だけど、ここは、公園だ。座布団をもらっても、地面に座るわけにはいかないから、また、今度にしよう」

ジョークが通じるのか、通じないのかわからないおっさんだ。

「それじゃあ、どうして、鯛が堀で泳いでいるんですか？」

知っていて、あえて聞く。聞いて、相手に喋らせる。これが会話を一分間続けるコツだ。人間関係を築く常とう手段だ。

「ここの堀は、海水なんだ。ほら、あそこに門があるだろう。あの門から海水がはいってくるわけだ。その先は、海につながっている。ここのお城は、誰が名付けたか知らないけれど、日本三大水城として有名なんだぞ。だけど、他の二大水城のことは、俺も知らないし、誰も知らないけれどな」

自分の事のように胸を張るおっさん。

「ほら、見てみる。堀の中の鯛を！餌を放り投げると、水面に浮かんだ餌めがけて、水の中から、空中に飛び出さんばかりに、口をつき出し、がつかつかと喰いついてくる。生命感が溢れているよ。喰うことがこいつらの命なんだ。見ているだけで、こちらも元気になる。そう、思わないかい、あんた」

おじさんの言葉に頷く。言う通りだ。餌がばら撒かれている辺りを、鯛が、何十匹も、行ったり来たり泳ぎ回っている。物音しない静かな堀だが、おっさんの餌やり場だけが、賑わっている。商店街で言えば、行列のできる繁盛店と、シャッターを下ろした店ぐらいの違いだ。鯛が、食べるということに、これだけ、一生懸命になっているのか。生き物にとっては、まず、食うことが何よりも先決なのだろう。この鯛の仲間も、おっさんの仲間の人間に食われているわけだ。食べている側がやがて食べられる側となり、ガツガツという音が、肉体を通して、伝達されていくわけだ。だけど、人間の笑顔という、実体のないかすみのような物を食っている天使の俺には、あまりピンとこない。

「ほら、すごいだろう。こいつら」

おっさんは、手に持っている食パンをちぎって、池の中に放り投げた。水面にパンが落ち、波紋が広がる。その中心部に、鯛たちの、口、口、口。ろ、ろ、ろじゃないぞ。口、口、口だ。その勢いに驚く俺の口が、ろ、ろ、ろだ。

「なんだか、こいつらを見ていると、生きることが素晴らしいと思えてくるよ。わしなんか、今、六十五歳。定年退職の後、同じ会社で、何年間か働いた。だが、ただ、惰性で仕事を続け

ただけだ。かつての部下が上司となり、その指示に従わなければならないからな。退職しても、変なプライドだけは退職できなかったわけだ。だけど、今は、こうして、この公園のボランティアガイドとして、やりがいを持って、県外や市外のお客さんを案内している。そして、こいつらに餌をやり生きる糧を与えてやっているとともに、こいつらからは生きる元気をもらっている。持ちつ、持たれつとは、こういうことだな」

おっさんの口から、しんみりとした言葉が出た。

「それで、あんたは、一体誰だい？」

ようやく、俺の顔を見る。口がぽかんと開いている。今、食パンを渡せば、そのまま食ってしまいそうな口だ。物真似ならぬ、口真似。鯛の元気さが、おっさんの口に以心伝心している。飼い鯛に飼い主が似たわけだ。

「見かけない顔だな。ボランティアガイドの新入りかい？それとも、刑事か探偵か。ひょっとしたら、殺人犯か？」

おじさんの顔がひきつる。

「まさか、テレビの見過ぎですよ。心配しないで、そんなんじゃないですよ」

「じゃあ、なんなんだ」

「俺は、天使の見習いですよ」

「天使？」

「「そう、正式には、まだ、天使じゃなくて、天使の見習いですけど」

「それじゃあ、俺の仲間だ」

「俺の仲間？」

「そう、仲間だ。俺は、今は年金暮らしだ。収入はわずか。わずかな金で生活している。遊ぶ金もないから、毎日、ここにやってきている。人呼んで、「貧乏天使」と言われている」

それも言うなら、貧乏神だろう。勝手に、神様と天使と一緒にしないでくれ。それでも、ここで相手を怒らしたら、次のステップに進めなくなる。我慢、我慢。人間も、天使も、神様も、この世に生きとし生けるものは、全て我慢が大切だ。

「その神様が、ここで何をしていますか？」

「お前も、天使のくせして、馬鹿な質問をするな。神様っちゅうものは、何もしないから神様なんだ。神様が、あくせくして、一分一秒を争うような仕事をしてみろ。それこそ、墮落してしまう。わしは、嫌だね。折角、手に入れた自由を手放したくない」

再び胸を張るおっさん。

誰が神様だ。何が自由だ。お前なんか、鯛に喰われて死んでしまえと思いながらも、先ほどの、「がまん」の三文字が瞳に浮かび上がる。上から読んだら、がまん、下から読んだら、んまが、なんだか、マンガの親戚みたいだ。

そうか、わかったぞ。天使にしろ、人間しろ、我慢すること自体が、無意味で、お笑いであるマンガの世界なのだ。もちろん、マンガだって、様々な分野がある。一般的に言えば、現実から逃避した世界のここのように思えるが、実際はそうじゃない。少し、大げさに表現しているものの、現実に根ざしている。現実に依拠している。この俺様だって、天使の見習いなんて、まさ

しく、マンガ以外の何物でもない。

「それで、その天使の見習い、つまり、わしの遠い親戚が、一体全体、何の用だ、おっ、わかったぞ、そうか、そう言うことだったのか。それならそうと、早く言ってくればよかったのに」

自称貧乏天使は、一人で、悦に入って、喜んでいる。俺には、全く、思い当たる節がない。こう言うときは、相手をそっとしておくか、なんでもいいから、うなずきマンになるしかない。一秒間に、何回、顎を首の下、喉仏の下につけるかを競争しなくちゃいけない。おっと、イエローカードがでたぞ。神様の分際で、仏様の名前を出すなんて、許されないだって。そう言う、閉鎖的な考えだからこそ、信者が増えなくて、団体の財政が困窮してくるわけだ。人類は皆兄弟ならば、人類が生み出した、神様、仏様だって、親戚みたいなものだ。仲良くやろうぜ、人生なんて。

話がかかなり脱線したけれど、とにかく、俺は、この貧乏天使を助けてやらなければならない。天使の見習いを卒業して、天使になるための第二関門なのだから。俺は、満面に笑みを浮かべながら、貧乏天使にやさしく語りかける。

「何か、困っていることがあれば、いつでもおっしゃってください」

俺は、ラブ・ノートの対象者を間違えたと思いながらも、つい、おせいじをかます。これが、天使の見習いたるゆえんだ。困っている人(?)を見つけると、つい助けたくなる。もちろん、天使になるための、第二ステップのためだが。それでも、このおっさんと話をしていると、遠い道のりか、迷路を歩いているのか、道草を食い過ぎて動けなくなるのか、そのうちのどれかになるように思える。どれにしたってろくなものじゃない。折角の、背中の翼が、何の役にも立たない。

「そうじゃなあ？」

おっさんは、頬に手をやり、考えだした。困っていることを考える人。そんなの、彫刻や絵画などのモデルにはならないだろう？

その時、団体の客がやってきた。添乗員が一人。お客さんは四十人ばかり。よくある観光バスツアーの一行だ。

「すみません、ガイドの方はいらっしゃいませんか？」

添乗員が俺たちに話かけてきた。

「わしが、ボランティアガイドだ」

「以前、電話でお願いしたように、この公園の案内をお願いしたいのですが」

ガイドのおっさんは固まっている。思考停止状態。鯛の餌でもやれば、口からでも動き出すか。

「そんなの聞いていないぞ」

怒った口調で言い放つ。

「そうですか、確か、吉田さんという方をお願いしたのですが・・・」

「吉田？吉田なら、今日は、まだ、来てないよ」

「本当ですか？吉田さんから、今日のガイドについて、お話を聞いていませんか？」

「聞いていない」

そっけない返事だ。俺は、少し気になった。

「それじゃあ、代わりにと言うことではありませんが、ガイドをお願いできませんか？」

「今、急に、そんなこと言われても困る。わしにだって、他に仕事があるんだ。吉田に頼んだのなら、吉田に連絡すればいいじゃないか」

おっさんの言う仕事とは、何の仕事か？鯛の餌やりか。それとも、俺との知的な会話か？

「それは、そうですね」

添乗員は、これ以上、おっさんと話をしても埒があかないと思ったのか、ポケットから携帯電話を取り出すと、俺たちに背を向けてしゃべり始めた。

「もしもーし。もしもーし。吉田さん、吉田さん！」

添乗員が困っているにも関わらず、冷たい態度のおっさん。さっき、ガイドはやりがいがあると言っていたのに、この急変した態度はどうしたんだ。絶対に何かあるぞ。いくら感の鈍い、天使にまだ遠い、見習いの身の俺でも、そんなことぐらいはわかる。くんくん、くんくん、匂うぞ、臭うぞ。憎しみの感情が、俺の目にも見えるし、耳にも聞こえる。舌にも苦みとして感じるし、皮膚の体毛が逆立っている。俺の五感全てに迫って来ている。今こそ、ラブ・ノートの出番だ。

「もしもーし。もしもーし、吉田さん聞こえますか？」

添乗員の声が、池に波紋を呼び起こすぐらい大きくなっている。それを上回る観光客の「この案内はどうなっているんだ。早くしろ、時間がないぞ」の騒がしい声。

「もしもーし。もしもーし。いえ、すみません。もうしばらくお待ちください」と、客に謝りながらも、耳には携帯電話を離さない添乗員。

「吉田さん、吉田さん、聞こえますか？」

「はいはい、聞こえますよ」

「よかった、ようやくつながった。それよりも、約束の案内の件はどうなっているんですか？あなたはこないし、別のガイドの人は、つけんどんだし、お客さんは怒りだすし、早く、なんとかしてくださいよ」

「はい、はい、わかりました」

「わかりましたじゃないですよ。吉田さん、あなたは今、どこにいるのですか？」

「どこにって、あなたの後ろにいますよ」

慌てて振り向く添乗員。後ろにはにこにこ笑っている男が立っていた。

「吉田さん、そこにいるのだったら、声を掛けてくれたらよさそうなものじゃないですか。笑っている場合じゃないですよ。早く、ガイドをお願いします。予定よりも、五分も遅れてしまいましたよ。お客さんは怒りだしたし、ホントに、お願いしますよ」

「金返せ、金返せ」

バスツアーの一団が、声を合わせて、合唱しはじめた。添乗員は、合掌して、吉田さんに頭を垂れる。その様子を見ていたおっさんは、鼻先で、ふふふふふんと笑う。振り返った吉田さんの顔には、幸せの印はなく、鬼の形相だ。

まさしく、この二人こそ、ラブ・ノートのお客さんだ。俺が二人をラブ・ノートまで案内して

やる。俺は踵を返した、吉田さんは、

「いやーすいません。大変お待たせしました。私は、こう見えても、実は堀の鯛でして、服を着替えるのに少し時間がかかってしまいました。皆さん、どうも、ごめんたい」

どっと笑う観光客。唾を吐くおっさん。冷たい視線を飛ばす吉田さん。二人の間には、見えないパンチが、フック、ボディ、顔面、フック、ボディ、顔面と飛び交っている。俺のラブ・ノートには、その影が映し出されている。

ツアーの一個師団をつれて、吉田さんは公園の案内に行ってしまった。添乗員は、冷汗をかきながら、最後尾に付く。後に残ったのは、自称ガイドのおっさんと、見習天使の俺の二人だけ。おっさんは、何事もなかったかのように、堀の鯛にエサをやっている。俺は話掛けた。

「吉田さんとは、何かあるんですか？」

おっさんは、俺の声を聞いたか聞かないか、知らない素振りで、反応がない。これは間違いない。無視と言う名のリアクション。俺の獲物だ。

「すいません。御主人さんは、佐藤さんですよ」

俺は、はったりの名前をあげた。日本人の多い名字を十ぐらい上げれば、どれか当たるだろうと思ったからだ。まずは、ナンバーワンから繰り出してみた、

おっさんは、「さとう」には何の関心も示さず、相変わらず、鯛にえさやりを続けている。時には、腹が減ったのか、腹が立ったのか、餌を口の中に放り込んで、吹き出している。おっさんの唾液でやや固まったパンは、池の中に落ち、鯛がほおぼる。おっさんと鯛の間接キス。俺との間には、風が吹きすさぶ。それなら、次の作戦はこうだ。

「鈴木さん、高橋さん、田中さん、渡辺さん、伊藤さん、山本さん、中村さん、小林さん、加藤さん」

どうだ、これだけ続ければ、どれか当たるも八卦、当たらなくても九人分の姓を言ったぞ。俺の声に驚いてか、公園に来ていた入場者が振り向いた。そして、はい、はい、はい、はい、はいと十人以上が返事をしてくれた。さすが、日本人ベストテンの姓だ。先ほど、駅前観光案内所のインターネットで、「日本人のうち、人数の多い姓ベストテン」を調べていてよかった。どこまで信用できるかが不安だったが、これで実証できたぞ。何でも、受け売りの知識ではなく、実際に使ってみることが大事だ。うーん。俺にしては、いいことを思いついたぞ。今後、俺に仕える見習い天使ができたら、訓示を垂れてやる。そのためにも、メモっとかないと。ラブ・ノートの端にでも書いておこう。

だが、肝心の餌やりおっさんは、振り向いてくれない。確か十一番目は、吉田だから、違うはずだ。それなら、十二番目の、「山田さん」と耳のそばまで近づいて、大声を発した。これなら、姓が間違っている、いやでも返事をするだろう。

「はい、はい。やかましいわ」

一体、どっちだ。正解か、はずれか？

「山田さんですね」

「そうだよ」

とりあえず、安堵。人と話すにしても、何らかの取っ掛かりが必要だ。さっきは、池の鯛で話

をつないだ。今、この不機嫌なおっさんには同じ手は通用しない。今度は、山田という言葉で、おっさんの心の扉を開かなければならない。開け、山田。

「それで、山田さん、どうして、吉田さんと仲が悪いんですか？」

俺は、いきなり、問題の核心をついた。さあ、相手はどうでるか？

「・・・、別に」

「そうですか、それなら、いいんですけど」

と、一旦、素知らぬ振りをして、もう一度、尋ねる。

「でも、仲よくはないみたいですね」

「・・・、生意気なんだよ、あいつ」

とうとう出た。おっさんの本音が。

「このボランティアには、俺より後から入ってきたくせに、全部仕切りやがる」

「はい」

「それだけじゃない。一番気に食わないのは、俺よりも、姓の数が多いということだ」

「はあ？」

「はあじゃないだろう。あんたも、さっき、日本で多い数の姓を順番に連呼しただろう。十番目までの姓は許せるが、吉田は十一番目で、山田は十二番目。俺よりも一番先というのが気に食わない。だから、吉田ってやろうは、山田の敵なんだ」

なんだ、おっさんは、俺が多い姓の順番で呼び掛けていたのを知っていたのか。

「そこをなんとかありませんかねえ」

俺は、ラブ・ノートの標的をこの二人に最終決定した。本当のところは、再び、他の人を探すのが面倒くさいだけなんだが。

「ならぬものはならぬ。なるものもならぬ」

おっさんは、そう言うと、引き続き、掘りの鯛に餌を投げ始めた。こんなときだけ、強情になるんだから。ホント、人間ってのは困る。特に、この年代のおっさんは扱いにくくていけない。おっと、それなら、この扱いにくい性格を利用してやろう。

「それじゃあ、少しでも、山田さんの気持ちを和らげるために、このノートに、吉田さんの名前を書いてみましょうか？」

「なんでなんだよ。吉田の、よ、も思い浮かべたくないのに、なんで、吉田の名前を書かないといけないんだよ。ふん、俺の今の気持は、五十音でいえば、四十六音しかないんだよ。吉田義夫。何が、義理人情に、偉丈夫の夫だ。俺の辞書から、やゆよの「よ」と、さしすせその「し」と、たちつてとの「だ」と、あいうえおの「お」の文字が消えているね。できれば、この言葉を使わずに、一生暮らしたいものだ」

ここまで徹底的に嫌うとはたいしたものだ。いや、いや、感心している場合じゃない。相手の名前がわかったぞ。次に、この吉田嫌いの山田の名前だ。ラブ・ノートの二ページ目の相合傘の下に、二人の名前を書き込めば、二人は仲良く、手をつなぎ、親友となる、予定だ。それは、さっきのフリーペーパーを配るバイトの女の子で証明済みだ。

「それじゃあ、山田さん。山田さんのフルネームを教えてくださいませんか？」

「なんだ、なんだ。なんで、俺のフルネームを、見知らぬお前になんか教えないといけないんだ。俺の名前は、個人情報だ。知らない奴に教えるわけにはいかない」

「でも、吉田さんの名前は、教えてくれたじゃないですか」

「他人の名前は、個人情報じゃない。単なる記号だ。言葉が不規則。不器用にならんでいるだけだ」

それは屁理屈だと思いながらも、少し頷く。

「でも、山田さんとは、こうして何十分間も話しているじゃないですか。もう、見知らぬ仲じゃないですよ」

「それもそうだな。それじゃあ、記念に教えてやろう。聞いたら、幸せになるかもしれんな」

何が記念か、何が幸せかわからないが、うまくいきそうだ。こういう人間は、高い、高いお山に登らせるに限る。あおげ、あおげ。登れ、登れ。初登頂記念だ。

「ありがとうございます。是非、拝聴つかまりたいです」

頭を垂れ、地面に向かって満面の笑み。そして、舌を出す。あっかんべーだ。向かいの相手には見えない。

「俺の名は、山田義夫だ」

「はあ？」

俺は、もう一度聞き直した。

「すみません。もう一度、お願いできませんか？」

「山田義夫だ。何回も、自分の名前を言わせるな。名前なんてものは、自分が言うんじゃないくて、人から呼ばれるものなんだ。それぐらい奥ゆかしさがあつたほうがいいんだ。選挙カーみたいに、何をするかなんて公約を示さずに、ただ、ただ、立候補者の名前しか声高に叫ばないなんて、みっともなくしていけない。おらっちは、そんな生き方は望まない」

なんだ、急に、おらっちと言い出して。そうか。姓が違っていても、名前が同じだから、よけいに反発を感じるんのか。でも、さっき、よ、し、お という言葉は、おっさんの辞書にはないと言っていたぞ。それは、自分で、自分を否定しているのかな。それとも、自分の辞書にはないから、人から呼ばれることを待っているのかな。どちらにせよ。名前は教えてもらった。後は、ラブ・ノートに、二人の名前を書き記すだけだ。

「や、ま、だ、よ、し、お さんですね、よしおは漢字で書くとどうなりますか？」

「義理人情に厚い、義と、困っている弱者を助ける偉丈夫の夫だ」

さっきの吉田義夫とえらい違いだ。もう一度、おっさんの名前を呼ぶ。

「山田義夫さん！」

「はい」

山田さんは、大きな声で返事をした。

「不思議なもんだな。小学校や中学校の時、名前を呼ばれたら、大きな声で返事をしなさいと先生から指導を受けて以来、頭にしみついているのか、口が、喉が、勝手に反応して、この年齢になっても、つい、大きな声をあげてしまう。あはははは」

山田さんは、頭を掻きながら照れて笑った。本当は、いい人なんだ。俺は、ラブ・ノートの

二ページ目を開いた。一ページ目には、先ほどの、田中洋子と山本純子の名前がある。その隣のページに、会い合い傘の絵を描く。その絵の中に、二人の名前を書く。「山田 義夫」と「吉田 義夫」だ。そう言えば、二人とも、漢字で書くと、山と吉の一字違いだ。この一字違いだけど、二人の間には、越すに越されぬ大きな山がある。一人、変に感じ入ってしまった。そんなことより、さっさと、名前を書かないと。

俺は、会い合い傘の右側に「山田 義夫」、左側に「吉田 義夫」の名前を書いた。果たして、その効果は？

俺がおっさんとノートを交互に見る。おっさんは、相変わらず鯛に餌やり。化学反応はまだおこっていない。そこに、さっきの観光客を引き連れた吉田さんが、ひとりで帰ってきた。案内が終了したのだ。

「あーあ、疲れた」

言葉とは裏腹に、吉田さんの顔は満ち足りた喜びでいっぱいだ。吉田さんの声を聞いて、おっさんが立ち上がった。そして、山田さんに近づいた。二人の間に緊張が走る、と俺には思われた。だが、おっさんから発せられた言葉は、

「お疲れ、吉田さん。しゃべりすぎて、喉が渴いたんじゃない。さあ、お茶でもどうぞ」

おっさんは、いつからか隠し持っていたお茶の缶を懐から出す。冷めないようにお腹で温めていたわけだ。さすが、元サラリーマン。気がきく。

「あ、ありがとう、山田さん」

戸惑いながらも、礼を言う吉田さん。やった、ラブ・ノートの効果だ。なんか、今回も、うまくいきそうだ。さすが、大天使様だ。俺は、二人の様子をじっと観察する。

「そうそう、さっきのグループの人に、お菓子をもらったので、山田さんも、一緒にどうですか。休憩タイムにしましょう」

吉田さんは、上着のポケットから袋を取り出すと、おっさんに差し出す。

「そうですね。次のガイドは、まだですから、そうしますか」

しらじらしいのか、うまくいっているのか、俺にはよくはわからないが、二人がコミュニケーションをとっているのは事実だ。

「この方は？」

吉田さんがおっさんに尋ねる。

「入園者の方で、私が掘りの鯛や公園の歴史について、話をしていたんですよ」

「そうですね。あなたはよかったですね。山田さんは、ここのボランティアガイドの大ベテランですよ。私も、いろんなことを教えてもらっています。まさに、私の師匠、ボランティアの鏡ですよ。そんな人に説明してもらうなんて、光栄ですね」

これほどいけしゃあしゃあと相手を誉めると、他人の俺でも、背中がむず痒くなってくる。これに対し、おっさんは、

「いあや、年を重ねてきただけです。それに比べて、吉田さんは、まだ、ガイドになって日がたっていないにも関わらず、よく勉強されていますよ。それこそ、私の方が教えてもらいたいくらいですよ」

ついさっきまでの、言動と百八十度異なる。これが本心なのか、それともラブ・ノートの力による、うわべだけのお世辞なのか。真意を測りかねるものの、人間同士が笑顔を絶やさず、話しかけている様子を見るのは、気持ちがいい。やはり、俺は天使なんだ。いやいや、そんなことに構っているわけにはいかない。俺には、大天使になるという、野望があるのだ。こんなところでとどまっているわけにはいかない。だけど、人間の笑顔が俺たち天使の栄養源だ、うーん、一体、どちらを選ぶべきか。

俺が俺の頭の中で、ああでもない、こうでもないと悩んでいる間にも、おっさんと吉田さんは、すっかり意気投合したのか、肩を組んで歩き出した。

「こんど、一杯、飲みに行きませんか」

「そりゃ、いいですね。是非、つきあいますよ」

ただ一人残された俺。東の空を見る。「L」文字は、くっきりと浮かんでいる。尾の横に、今、生まれたばかりの雲、「O」の文字が浮かんでいた。ミッションは成功だ。だけど、簡単すぎるくらいに二人が仲良くなったぞ、と訝りながらも、残りの二文字を目指す。おっさんと吉田さんが、喧嘩をしないうちに、「L」や「O」の文字が消えないうちに、俺は次のターゲットを探すことにした。

第六章 墮天使へのセカンドステージ

新たなターゲットを見つけるため、空に浮かんだ見習い墮天使。仲がいい二人の関係を、無理やり（さっきは、何もしていないが）引き裂くのは、いかがなものかと内心思いながら、そんなことでは、いつまでたっても見習いのままだぞ、というもう一人の自分の声がある。この葛藤を鎮めたい、整理したい気持ちとなる。

「おっ、あんなところに、城があるぞ」

そこは、珍しい水城。濠には海水が引き込まれ、鯉じゃなく、鯛やヒラメなど海の魚が泳いでいる。残念なことに、乙姫様は舞っていない。また、残念なことに、真ん中に聳え立つ天守閣はない。それでも、城の周りがある櫓がかつての城の雰囲気醸し出している。

「あああ、ここは落ち着くなあ」

思わず、声を上げる見習い。濠を見る。

「おっ、鯛が見える。これがホントの見える鯛、見で鯛、めでたいだ」

見習いは、子どものように、濠の柵に捕まって身を乗り出しながら、一人でジョークを言い、一人喜ぶ。

「お客さん、ご案内しましょうか」

振り返る見習い。

「お客さん、ここは初めてですか」

「ええ、初めてです」

相手は、黒いマントを被った見習いの頭から足元までを見て、

「私もあなたのような人を会ったのは初めてです。いや、さっき、会ったような気がしますね」と声を掛ける。

「もし、時間があるのでしたら、この公園を案内しますよ。もちろん、お金なんていりません。無料です。ボランティアです」

相手の顔をまじまじと見る見習い。確かに、ボランティアガイドと書いた身分証明書を首からぶら下げている。すぐ側にはテントが立てられ、もう一人のガイドが座っている。

「私は、吉田義夫です。向こうに座ってるのが、山田義夫さんです。どちらか一方がご案内しますよ。もし、よかったら、二人でご案内してもいいですよ。一回で二人の説明、まるでグリコのキャラメルと同じで、美味しい瞬間が味わえますよ。私たち、これをグリコ案内と呼んでいるんです。もちろん、あなたのためだけの特別バージョン、おまけですよ。ねえ、山田義夫さん」

「ええ、もちろんですよ」

会話を聞く限りでは、仲のよさそうな二人。あえて、仲の良い者同士を、喧嘩別れしなくてもいいだろう。もっと、普通の関係の二人を探そうとした見習い墮天使。

「ええ、ありがとうございます。でも、あまり時間がありませんので、わざわざ案内していただくなくても結構です」

見習いとしては、嫌味なく、丁重に断ったつもりだったが、そこで、

「遠慮することないですよ。私に、是非、案内させてください」

と、しゃしゃり出てきたのは、山田さんと呼ばれた人物。

「吉田さんの言い方が悪かったのかも知れませんね。私たちは、ボランティア。無料でご案内しますよ。わずかの時間でも結構ですよ。短い時間でも、短い距離でも、どこかの悪徳タクシーのように、案内拒否なんか決してしませんから」

吉田さんと見習いの間に体を入れてくる。

「はあ。ありがとうございます」

少し強引だが、その強引さに、見習いも案内を受けてもいいかなと思った瞬間。

「山田さん。お客さんが案内はいらないと言っているんだから、無理強いしてはいけませんよ」
助け船を出す吉田さん。これを聞いた見習いは、やっぱり、案内してもらうのはやめようかな。いやいや、この主体性のなさ、自分がないというか、強いものに巻かれたり、強い風に吹き飛ばされたりすることが、自分が見習いから墮天使に昇格できない所以かな、と顎に手をやり、悩み始めた。

これを見て、

「吉田さん。あんたが変なことを言うから、お客さんが悩み始めたじゃないか。お客さんの気持ちを少しでも汲んで、楽しい気持ちにさせるのが、俺たち、いや私たちの仕事じゃないのかね」

「何を言う、いや、おっしゃるのか、山田さん。あんた、いや、あなたのその強引さが、お客様の気持ちを萎えさせているんだよ」

「そんなことはないぞ、吉田。お前は、前から気に食わなかったんだ」

「こちらこそ、あんたに食われるほど、間抜けじゃないぞ。山田」

「よくも、言ったな。吉田」

「ああ、何度でも言ってやる。お前は、すかたんだ。山田」

「お前こそ、お前のかあちゃはでべそだ。吉田」

「ふざけるな。山田」

頬づえをつく墮天使の側で、口喧嘩を始めるボランティアの二人。見習いは、何の気なしに、首からぶら下がる証明書を見ながら、手帳に二人の名前、「吉田義夫」、「山田義夫」の名前を書く。

「へえ、山と吉以外は、同じ名前なんだ」

感心している見習いの側で、口喧嘩からシャドウで殴り合いに切り替えた二人。

見習いは、思わず、

「二人とも、山と吉以外は、同じ名前なんですね」

と、声を掛ける。すると、二人から同時に怒声が。

「うるさい。人が一番気にしていることを言いやがって」

「ホントだ、ホントだ」

当事者間の地域の争いから三者間の大戦に変わろうとした。二対一では、いくら、墮天使でも、歩が悪い。三十六計、逃げるが勝ちとばかりに、背中羽根を羽ばたかし、空へ飛び上がった。

「こら、逃げるな」

「まだ、決着はついていないぞ」

地面から罵声。

「じゃあねえ、二人仲良く」

思ってもいないことを口にして地面から目を西の空に転じる見習い。そこには、アルファベットで「A」の字が浮かんでいる。その横には「H」の字も、まだ消えずに浮かんでいる。これで「HA」だ。

「ハか？まさか、ハハじゃないよな。お笑いだ。空に字が浮かんだのは、ステージがクリアされた証明だろうが、さっきも、今も、俺は何もしていないぞ。何もしなくても、喧嘩別れさせるのが、墮天使の墮天使たるゆえんなのか」

再び、空に浮かんだまま頼杖をつく見習い。その下では、

「見ろ、あんたが余計なことを言うから、客が逃げたじゃないか。吉田」

「心配をしないでも、あんたの顔を見たときから、客は逃げているよ。山田」

「何だ、その言い草は。吉田」

「何度でも言ってやる。あんたのその不機嫌そうな顔が客を逃がすんだ。山田」

地上でのささやかないさかいを後にして、次の獲物を探す見習い墮天使。

第七章 天使へのステップⅢ

俺は、背中の中の羽をはばたかせながら、公園の一番高い所に上がった。この公園は、昔、天守閣があったが、火事で焼けてしまったそうだ。今は、再建に向けて、様々な調査や資金集めが行われているらしい。もちろん、この話は、ガイドからの受け売りだが。

昔、天守閣が建っていたところはお堂が建立されていたが、天守閣の再建の調査や、崩れ出した石垣の修復のために、今は、なにもない。十メートル四方の空き地となっている。俺は、そこに舞い降りると、世は満足じゃ、の気持ちで、下界を見る。誰か、困っている人はいないか、仲たがいをしている人はいないかを探す。本当は、俺が一番、困っているのだ。本当は天使になりたいくて、俺はこうしているわけじゃない。大天使様が怖くて、やっているだけだ。今更、大天使になって、わっかが、金メッキから、本物の金メダルになったところで、嬉しいわけじゃない。

だけど、やっぱり、なれるものなら、大天使になってみたい気もする。誰でも、新たな位置に立つことで、大物になることができるのだ。仕事が、職責が、その者をつくるのだ。これまで業績を成し遂げた人は全てそうだ。うーん、アンビバレンツ。

そう思いながら、公園をみると、保育所の園児たちが、桜の馬場と言われる広場に集まっていた。名前のとおり、桜の木が広場の周りに植えられている。花は既に散り、新緑の葉が、子どもの成長に負けまいと背伸びをしている。今日は、遠足か？仲良くさせるのは、別に、大人だけでなく、子供でもいいだろう。あんまり遠くに行くのは面倒だから、この際、近場ですまそう。それに、子どもの方が、喧嘩をしやすいし、仲好くもなりやすい。安易な方法だが、このノートの力をいろんな人の試してみることも大切だろうと自分で勝手に納得した。

早速、広場に舞い降りた。子どもたちは、先生からいくつかの注意点をうけると、仲のいい子同士が二人から三人のグループになって、芝生に座り、弁当を食べ始めている。俺は、松の木の下の日陰に座っている二人の女の子に目をつけた。

「こんにちは」

俺は、最大限の笑みを浮かべ、できるだけやさしく話しかけた。二人は、お互いの顔を見合っただけで、顔を下に向けた。恥ずかしいのか。俺は、もう一度、犬の頭を撫でるような声で、または、猫のあごの下を撫でるような声で、

「こんにちは」

と、声を掛ける。返事がない。もう一度、試してみる。

「こんにちは」

女の子たちは、急に立ち上がると、他の場所に立ち去った。そう、逃げたのだ。向こうの方で、しゃべっている声が聞こえてきた。

「だーれ、あのひと」

「知らない」

「知らない人と話なんかできないよね」

「ねーえ」

こまっしゃくれたガキども、いや、お子様たちだ。東の空を見上げる。まだ、LとOの文字

はくっきりと見える。その横をジェット機が横切った。一瞬、OがQに変わる。

「何しやがんだあ、俺の大事なOに。この腐れジェットが」

我を忘れて大声を上げてしまった。向こうの方で女の子たちがこちらを見て笑っている。知らない人とは話をできないけれど、知らない人は笑えるのか。

気分を害した俺は、再び、空に舞い上がる。やはり、別の場所で探さないといけない。立て続けにうまくいったものだから、つい調子に乗って、近場で何とかしようとした俺が、あかしたな、じゃなく、浅薄だった。苦労は、もうひとつ重ねてこそ、十労になる。なんのこっちゃ。

だが、空から見る景色はすばらしい。目の前の青い海。近くには島々が見える。行き交うフェリーや連絡船。一幅の絵画だ。いあや、一服するどころか、つい、腰を落ち着けて、お茶を十杯も飲み過ぎ、満腹になりそうだ。港には海浜公園が広がり、ベンチや東屋が設置されている。そこにいるのは、誰だ。そう、次の獲物を見つけたぞ。ベンチに横たわるホームレス、君たちだ。君と言っても、潮風に吹きさらして、赤茶けた顔は七十歳過ぎに見える。不幸を全てしょいこんで、あちこちのゴミ箱に空き缶を投げ込んでいる彼らに愛の手を。俺は、直滑降で向かう。

「やあ、こんにちは」

東屋には、ベンチに横たわっている男と、反対側に寝そべっている男が二人いた。あきらかに、仲がよさそうにない。これはチャンスだ。再度、あいさつする。

「こんにちは」

わざと言葉の順番を間違えて、笑いを取ろうとしたが、相手からのリアクションはない。やはり、この二人も。知らない人とは話せないのか。教育の力はすごい。半世紀近くたっても、脳に刻み込まれているのか、小学校の時の教えを忠実に、着実に、見事に、頑なに、どうでもいいぐらいに、守ろうとしている。恐れ入りの、天使の羽だ。なんのこっちゃ。

俺に近い方の男が薄眼を開けた。よっぽど眠いのか、体はやせこけているのに瞼だけが肥満なのか。

「やあ」

おっ、返事をしたぞ。生きている。生きている。生きていることはいいことだ。

「何か、喰わしてくれ」

男が返事した。

「俺にも、くれ」

もう一人の反対側に寝そべっている男も続いた。俺は、ポケットをまさぐった。あるのは、鯛の餌。鯛の餌と言っても、駄菓子屋で売っているビスケットだ。何かに役に立つんじゃないかと、さっきの公園で落ちていたのを拾っていたのだった。

「それ」

俺は、ベンチで寝傍っている男と、東屋にもたれかかっている男に一つずつ手渡した。

「あ、ありがとう」

「ご、ごぜえますだ」

いまどき、こんな返事する奴はいない。二人で、一人か。と言うことは、実は、二人は仲がいいのか。俺が妄想している間に、二人は鯉の餌を食べつくした。

「もう」

「ないのか」

まだ、力のない声だが、先ほどよりは、言葉がはっきりと聞こえる。俺は、今度は、左のポケットをまさぐった。ポケットを探せば何かが出てくる。種も仕掛けもある当り前のポケットだ。おおおっ、あった。飴玉がちょうど二個。先ほど、駅前にいたときに、もらったものだ。それを二人に渡す。

「あ、ありがとう」

「ご、ごぜえますだ」

二人は、飴玉を口に投げ込む。急に元気になった。糖分の力はすごい。目に見えて、効果を発揮する。人間は、意思じゃなくて、食いのエネルギーで生きている存在なんだとあらためて実感する。その点、俺たち天使は、幸せを掴みたいという意志のエネルギーで存在している。二人は、寝転がったままから、ゆっくりと体を起こすと、ベンチに腰かけた。横になったままでも疲れるとは、病院で入院している患者から聞いたことがある。人間は適度に動かないとダメな動物なんだ。俺たち天使も、人間のどもの幸せのために、こうして適度に動き回っている。

「ふあわああ、助かった」

「ふあああ、生き延びた」

だが、二人は、一緒に座ることなく、反対側を向いている。一方が海を見て、もう一方が海と反対側の市街地だ。やはり、そうだ。俺の直観は当たった。二人は、仲が悪い。間違いない。俺の獲物だ。そう、確信した。

「二人は、友だちですか？」

返事はない。眼も、耳も、口も、鼻も閉ざしたままだ。俺は、更に、確信を深めた。こいつらを何とか仲良くさせてやる。何だか、意地になった。別に、大天使になれなくてもいい。この腑抜けた奴らを俺の意のままに動かしてやる。

「まだ、お腹は空いていますか？」

「はい」「はい」

自分の都合のいい時だけ、返事が重なる。俺は、ポケットをもう一度、まさぐった。何もない。あるのは、先ほどのビスケットのかけらぐらいだ。これじゃあ、戦力にならない。

「ちょっと待っていてください。すぐに、何か、美味しい物を持ってきますから」

「お願いします」「お願いします」

低音と高音のハーモニーだ。絶対にいける。Vはもらったぞ。勝利のビクトリーだ。大天使は、もうすぐだ。右手の指でVサインをする。あれっ。さっき、俺は、大天使なんて、どうでもいいと言ったけれど、眼の前に手が届く距離になると、やはり、賞状やメダルが欲しいらしい。所詮、俺もただの天使かと思ったけれど、いや、欲望こそ、向上心こそ、生きる価値を見出すものなんだと、胸を張る。胸を張る前に、財布のひもを緩めないといけない。

俺は、近くのコンビニに飛び込んだ。コンビニは、レジが二つあった、従業員は、二人。一人はレジの前に立ち、もう一人は棚のお菓子を並べ替え、それが終わると、冷蔵庫の中のペットボトルを詰め替えしている。よく見る光景だ。俺は弁当コーナーに進む。梅、シャケ、コンブなど

のおにぎり。ハム、卵、チーズなどのサンドイッチ。とんかつ定食、やきそば定食、日替わり弁当。喰い物は豊富だ。うーん、目移りする。

だが、問題は値段だ。金がない。天使の見習いでは、まともな給料が入らない。大天使様からもらうお金は、小遣い程度だ。徒弟制度は厳しい。ふくらみのない財布を取り出す。人間円にして、千円余り。あのホームレスたちに弁当を買う余裕はない。だが、なんでも先行投資が必要だ。眼先の金をけちって、鯛をつる予定が、めだかじゃ話にならない。へたすれば、ぼうずだ。

俺は、すぐ近くに見えるシンボルトワーから飛び降りるつもりで、（俺が飛び降りても羽根があるから、命には別条はない。この点、安全性は確認している。抜け目がないと言ってくれ）金を出すことにした。四百円のシャケ弁当だ。ごはんと梅干、シャケにわずかばかりの千じゃなく、一万ぐらいに細く切り刻まれたキャベツに、あまりの小ささで、申し訳なさそうに、赤い顔と青い顔を見せているミニトマト。おおおお、きんぴらごぼうが付いているぞ。しけた弁当だが、あのホームレスたちにとっては、きっと、豪華な食事だろう。二つで、八百円。残金、二百円。厳しい、だが、大天使はもうすぐだ。豊かな生活が待っている。俺は、意を決し、レジの前に立つ。大学生風の男が商品を預かった。

「ありがとうございます。このお弁当、温めましょうか？」

「そのままでもいいです」

今日、何十回目かの挨拶にも関わらず、元気のいい返事。俺はこの若者に好感を持った。

「八百円になります」

若者がピッと光線をあてると、ガシャンとレジスターが開いた。若者は弁当を袋に入れようとした。その時、何げなくシールに眼をやった。若者が笑顔から怒りの顔に変わった。

「少しお待ちください」

そう言うなり、若者はシャケ弁当を持って、商品棚を整理している同僚（多分、同じ年ぐらいだろう）に、足早に近づいた。そして、眉をしかめ、マシンガンのように唇を動かしながら、同僚の男を怒鳴りつけている。何があったんだろ？。俺は、少し気になったが、早く俺の獲物の所へ行きたい一心だ。そうしないと、あの二人はどこか別々の場所に行ってしまう。握りしめつづけたせいか、俺の汗のせいか、千円札がべこりとお辞儀をした。だが、男は、引き続き怒鳴っている。

俺は少し気になった。二人の会話を聞いてみたいと思った。ひょっとしたら、俺の獲物かも？伸びる耳。天使の体は自由自在だ。ダンボのように大きくなって、空を飛ぶこともできるし、キリンの首のように長く伸びて、人の話に聞き耳を立てることもできる。どうだ、便利だろう。俺は、誰に自慢しているんだ。早速、聞き耳を伸ばす。

「お前、一体、何度、言ったらわかるんだ」

「何のこと？」

「この弁当見ろ。賞味期限まで、後一時間しかないじゃいか。オーナーに何度も言われたらどう？弁当は、新鮮さが一番だって。このまま売ったんじゃ、この店の信用が失われるだろう。商品を片付けるか、値段を訂正して下げるかどちらかだ」

「いいじゃん。賞味期限を見ない客が馬鹿なんだから」

「馬鹿はお前だ。だから、いつまでたっても、オーナーから信用がなく、レジに立てないんだ」

「割引シールを貼らなかつたぐらいで、そこまで言うか」

「俺は、オーナーからこの店を任されているんだ。俺の言う通りしないんだったら、この店やめてもらうぞ」

「ああ、わかりました。店長どの」

「なんだ、その言い草は。オーナーには、俺から報告しておくからな」

会話が終わった。俺は、聞き耳を急いで引っ込めた。あまりにも勢いよく引っ込めたので、耳がぼよよん、ぼよよんと何回もトランポリン状態となる。こんな姿を人間に見られたら、俺が天使だと見破られてしまう。慌てて、両耳を押さえる。叫ばないムンクだ。

若者が意気揚々と戻って来た。もう一人の商品係は、何もなかったかのように、ただし、レジにはそっぽを向いて、新しい商品を奥に、古い商品を前面に入れ替えしている。

「大変、お待たせしました。あれ、お客様、どうかしたんですか？耳が痛いんですか？」

さすが、賞味期限の時間をチェックする男だ。俺の様子が変わることに気がついたらしい。俺はすぐさま返答する。こういう時は、早めがいい。

「いあや、あまりにお腹がすき過ぎて、耳からエネルギーが漏れるのを防いでいるんですよ」

我ながら洒落た答えだ。

「そうですか。それで、同じお弁当を二つも買うんですね。大変お待たせしてすいません。お客様、実は、このお弁当、賞味期限まで後一時間です。本来ならば、割引きにするか、商品を取り除くかのどちらかです。私どもの商品担当者のチェックミスです。大変ご迷惑をおかけしました。もし、よろしければ、他のお弁当に変えていただくか、もしくは、このお弁当でよろしければ、一個につき五十円値引きいたします」

何と、親切な店員だ。確かに、弁当に張られたシールを見ると、賞味期限まで一時間だ。それを確認しなかったのは、こちらのせいだ。もちろん、自分が食べる弁当ならば、事細かくチェックをしたらろう。だが、他人にくれてやる弁当だ。早く買わなければ、と気がせいたため、賞味期限なんか気にしていなかった。俺は店員の親切に感謝した。他の弁当に変える気はない。少しでも値段の安い弁当がいいのに決まっている。お金は自腹で切り、弁当は他腹に入るのだから。

「この弁当でいいですよ」

「ありがとうございます。大変、ご迷惑をおかけしました。それでは、値段を訂正して、七百円になります」

笑顔がこぼれている店員。マニュアル通りの顔だろうが、見ている者としては、嫌悪感はない。俺は、一人では立ってられない、ふにゃふにゃの千円札を出した。

「千円をお預かりします。お釣りは、三百円です。お確かめください」

完璧だ。何も言うことはない。だが、完璧すぎるがゆえに、俺は気になった。レジの男とケースに商品を詰め替えしている男とは、明らかに不仲だ。つまり、俺にとってチャンスなのだ。レジの男の名札を見る。「岡」だ。姓だけでは、ラブ・ノートに記載しても効果がない。日本人ベストテンの姓には入っていないものの、日本全国の「岡」さんだけで、何千人、何万人、ひよと

したら、何十万人もいるだろう。フルネームが欲しい。俺は、相手に疑問を抱かれないように尋ねた。

「岡さん。今回は、親切な対応ありがとうございます。私の方からも、オーナーに礼を言いたいので、岡さんの下の名前も教えてもらえませんか」

どうだ、これなら、不審がられずに済む。

「そんな。大げさな。私としては、ごく当たり前のことをしただけですよ。でも、お客様がどうしてもと言うのなら、申し上げます。いかなる台風や嵐にも毅然として直立している木が立っている岡の「岡」で、真実とは何か、常に自問自答しながら、生きている誠の心を持った「誠」です。すなわち、「岡 誠」です」

お前は、講釈たれか。最初から、自分の名前を言いたかったんじゃないか。とりあえず、レジの兄ちゃんの名前は聞いた。後は、商品ケースのアンちゃんだ。

「それじゃあ、岡 誠さん。あえて、フルネームで呼ばせていただきますが、あの商品係の方の名前は、誰ですか？」

「ああ、あいつですか。語るに足りない名前ですよ。お客様がどうしてもと言うならば、言いますけど。でも、今日のことは、オーナーには内緒にしてあげてください。あいつも可哀そうな奴なんです」

余裕のよっちゃんの誠ちゃんだ。改めて、真実一路の「岡 誠」を見つめる。

「では、申し上げます。山賊がうようよしている「山」に、本当のことなんかこれぼっちも言わない「本」に、生まれてから親孝行なんてしたことがなく、親を泣かすような不孝ばかりをしてきた「孝」、合わせてもばらばらになってしまいそうな「山本 孝」です。ホント、名は体を表すとは、その通りですね」

さっきのフリーペーパーの女たちも、同じようなことを言っていたけれど、よくもまあ、これだけ他人の悪口が言えるものだ后感心する。こんなコンビニなんか、二度と来るもんか。

「ありがとうございます。彼は、「山本 孝」さんですね」

「ええ、そうです。山賊がうようよしている「山」に、本当のことなんか・・・」

同じフレーズは二度と聞きたくない。ホームレスも腹をすかして待っていることだろう。早々に、仕事を終えないと。俺は、カバンからノートを取り出すと、「岡 誠」、「山本 孝」の名前を書きつけた。

「本当に、いいですよ。僕の話はオーナーに話さなくても。でも、失礼があったことは、どんどんと申し出てください。それが、このお店のサービスの向上につながるんですから」

新撰組の第一隊長のような顔をして、岡 誠が立っている。その傍ら、野良犬のような、山本 孝を余裕の表情で眺めている。俺は、二人の顔を交互に眺める。俺にとっては、鴨ネギだ。天使への道が更に一段階進むチャンスだ。さあ、二人の名前を書いたぞ。ラブ・ノートの化学変化は起こるのか？もう一度、二人の姿を見る。岡の方は、もう俺の存在なんか忘れたかのように、次から次へと訪れる客に向かって、仮面笑いを続けている。

山本の方は、パン棚の一番下で、かごに古い商品を入れ、新しい商品に入れ替えている。状況は変わらず。この二人は、あまりにも仲が悪過ぎて、ラブ・ノートの効果も期待できないのか。

俺は残念に思いながらも、今目の前の獲物から、次の、ベンチに座っている獲物の方に関心を移した。

「ありがとう」

と一言、いかなる台風や嵐にも毅然として直立している木が立っている、エトセトラの岡 誠に礼を言うと、袋に入った一個五十円円引きの弁当が二個入ったレジ袋を指にひっかけて、店のドアを押した。

急がないと、あの二人が、ホームレスどころか、東屋レスになっているかもしれない。店から見える青空。ビルと歩道橋とホテルに囲まれ、三角形の空だ。その一部に、白い雲が見えた。方角は東。何かしらの文字のようだ。まさか。俺は、道路沿い窓ガラスからコンビニの中を覗く。先程まで、しゃべることのなかったあの二人、岡と山本、地形的によく似ている二人が、同じレジの中に入って、客の商品を袋に入れる係とお金を清算する係に役割分担し、仲良く談笑しながら仕事をしている。

やったあ。俺は、ビルの陰から急いで、港の公園に向かう。あそこなら、何にもじゃまされずに目いっぱい空を見上げることができる。逃げ、逃げ。振り向いたら、空に、俺の期待する「V」の字が出ているはずだ。だが、どうせならば、完璧な形で空を仰ぎたい。おかずが右往左往する弁当を片手にダッシュをかます。もういいだろう。

昔、子供の頃、お正月に近所の空き地で凧揚げをした。その時、父親に凧を持ってもらい、俺は後ろを振り向かずに、糸を持って走った。後ろは気にせずに、とにかく思い切り走った。たるんでいた糸が引っ張られる。それまで、何の緊張感もなかった糸にある抵抗を感じた。

「それ」。父の声だ。俺は、まだ、走る。まだ、振り返らない。後ろを振り向かなくても、糸が上に引っ張られているのがわかる。もう、いいだろう。それでも、スピードは落としながらも、走ることはやめない。左肩越しに空を振り返る。見えた。俺の凧だ。ようやく、走ることをやめ、立ち止り、大空高く、浮かんでいる凧を見つめた。その下には、父が、大天使の父が、笑って立っていた。

いかんいかん、何の感傷に浸っているんだ。俺は、つまるところ、空に浮かぶ「V」の字を見る気持が、子供の頃の凧上げの時の感動と同じだということを説明したいだけだ。誰に？俺に。それだけ、俺は、自分を誉めてやりたいわけだ。

見た。確認した。はっきりとこの二つの眼で。「V」の字だ。信じられないのならば、ひとつの眼を閉じればいい。右目を閉じる。左目で見えるのも、「V」の字だ。左目を閉じる。一瞬、眼の前が真っ暗だ。「V」の字が消えた。だが、俺は慌てない。かすかだ、頭の中に「V」の字の残像がある。消えないうちに、右目を開けた。やはり、空には「V」の字が見えた。

安心して、左目を開けた。両方の眼で、「V」の字が確認できた。片目だけで見た時よりも、奥行きのある「V」の字だ。俺は空に向かって指をさし出した。「V」の字だ。空に浮かぶ「V」の字と俺の指の「V」の字。二つ合わせて、ダブルV。VとVを並べれば、Wだ。Wの奇跡。Wの真実。俺は、空高く浮かんだ雲への新たな見方の発見に有頂天になり、二人のホームレスのことは忘れ去っていた。

第八章 墮天使へのサードステージ

見習い墮天使は思う。幸運なんて、探すんじゃなくて、ほっといても向こうからやってくるものなんだろう。空からの眺めは最高だった。地上の人間たちのいざこざに関わるよりも、こうして雲のように、空に漂っている方がよい。お城の中の公園では、黄色い帽子を着た子どもたちがはしゃいでいる様子が見える。遠足か。でも、あの子供たちだって、私が行こうが行くまいが、仲の良いのは一瞬で、直ぐに、自我を出して、喧嘩別れをするか、十数年後には互いに口を利かなくなるのだろう。それなら、私の存在価値は？ほっておいても、喧嘩する人間どもに、墮天使がわざわざ近づくこともないじゃないか。空からでも、椅子の上からでも、高みの見物をしていれば、自然に、そう自然に、どんなに仲のよい同士でも、離れ離れになるのだ。ある意味では、私が何もしない方が、上手くいくのかも知れない。そうすれば、私は、見習いから、正式な墮天使になれる。果報は寝て待てか？じゃあ、果報って何？

気持ちを切り替えた見習い墮天使は、お城近くの海浜公園に空から移動する。公園は、いくつかの東屋が建っている。あそこで、昼寝でもするかと思い、側まで近づく。港では、フェリーを始め、旅客船などが、入れ替わり立ち替わり発着している。その光景を眺めているだけでも、時間がつぶれる。船は、目の前に漂う島や対岸の陸地へと向かう。乗っている人は急いでいるのだろうが、この風景が止まっているかのように、見習いには見える。それよりも、喉が渴いた。東屋に行く前に、お茶でも買うか。見習いは、すぐそばのコンビニの前に降り立った。ざざざざざ。羽根をたたむ。そのまま、ドアを押す。

「いらっしゃいませ」

ハモった声。店員二人がこちらを見ている。満面の笑顔だ。続いて出た言葉は、

「バットマンだ」

声がした方を見た見習い。余裕しゃくしゃくで、手を広げ、親指を突き出すポーズ。だが、内心では、

「誰がバットマンだ。俺の方がもっとかっこいいはずだ」と思う。だが、持ち前の気のよさから、つい、相手にあわせてしまう見習い墮天使。これだから、私は、いつまでも見習いのままなんだと、気を落とす。そんなことはどうでもいい。私は、喉が渴いているんだ。店内を物色する。

「何をお探しですか？」

バットマン風の客に気を魅かれたのか、店員が寄って来た。うっとおしいなあと思いながらも、つい、返事をする見習い。

「お茶が欲しいんだけど・・・」

「それなら、これはどうです。このコンビニ独自の新製品で、値段も安くなっていますよ」

バットマン、いや、見習い墮天使は、店員がショーケースから取り出したペットボトルを見た。キャップには、バットマンのフィギュアがついている。ちょうど、バットマンが羽根をたたみ、新製品のお茶を飲んでいる姿だ。芸が細かい。バットマンのお茶なんて聞いたことがないけれど、この細かい細工には感心した。手を伸ばし、この商品を購入しようと決めたときだ。

「ちょっと、それ、失礼じゃないか、山本君」の声がする。見習いと山本と呼ばれた店員は、バットマン茶を手に持ったまま、レジの方を振り向く。声の先には、もう一人の店員が立っていた。

「いくら、お客さんがバットマン風だからと言って、好きかどうかもわからないし、それにとってもじゃないけれどバットマンのかっこうが似会っていないお客さんに、バットマン茶をすすめるなんて」

体が、顔が、お茶を持つ手が固まる二人。お前の方がよっぽど失礼じゃないのか。私だって、バットマンなんか好きじゃない。好きでもないバットマンなのに、勝手にバットマンのファンだと決めつけられて、しかも、この姿が似会っていないだと。私は墮天使だ。いや、墮天使見習いだ。勝手にバットマンじゃない。ララララララララじゃない。人間ごときに、評価されたくない。怒りの気持ちを顔に出す見習い。その様子を見てか、山本と呼ばれた店員は、

「岡さん、それはお客様に対して失礼ですよ。似会っていようがいまいが、服を決めるのはお客様の勝手ですよ」

一瞬、肯きかけた見習いだが、山本の言い方では、自分の格好が似会っていないことになる。それも失礼だ。お前たち、人間に何がわかると、心の中で憤慨する。

「いや、違うぞ、山本。お前の言い方の方が失礼だ」

そうだ、そうだ、もっと言え（見習いの心の中）

「いや、岡、お前の方が失礼だ」

そうだ、そうだ、もっともっと言え（見習いの心の中）

「何が失礼だ。上司に向かって、何を言うか、山本」

「何が上司だ、岡。オーナーに媚びて、店長になったぐらいで。店長なら、俺でもできるし、もっと上手くやる」

「何が上手くやるだ、山本。やったこともないくせに。お前なんか、もう顎だ、さっさと、荷物まとめて、この店から出ていけ」

「ああ、こんな店なんか、いつでもやめてやる、岡。だが、お前になんかやめさせられてたまるか。オーナーに直接話をして、お前こそやめさせてやる」

「ふざけるな、山本」

最初は、高みの見物だった見習いだが、二人の口論がヒートアップするに伴い、何とかなだめようと、声を掛けた。

「あの」

だが、頭に血が上って、噴火活動を繰り返している二人には、その声は聞こえない。もう一度、声を掛ける。

「あの」

振り向く二人。

「うるさいって言ってんだろう」

「そうだ、元々、あんたが、似会ってもいなくせに、バットマンみたいな服装をするからもめているんだ」

「そうだ、そうだ」

鬼の形相の二人。見習いは、相手の勢いに負けて、思わず謝ってしまう。

「すいません」

何で、私があいつらに謝らなければならないんだ。ぐちを言いながら、手帳を広げ、二人の名前を書こうとする見習い。なんだっけ。最近、物忘れが酷いなあ。特に、やり場のない怒りで、頭の中が沸騰しているだけに、必要な記憶が浮かび上がってこない。その時、手助けの声が飛ぶ。

「だから、お前は、山賊がうようよしている「山」に、本当のことなんかこれぼっちも言わない「本」に、生まれてから親孝行なんてしたことがなく、親を泣かすような不孝ばかりを繰り返してきた「孝」、合わせてもばらばらになってしまいそうな「山本 孝」なんだ。ホント、名は体を表すとは、このことだ」

「お前こそ、ちょっとした風でもすぐに強い方になびく木が立っている「岡」で、真実とは何か、自分のことしか考えないで、いつも他人を踏み台にしてやろう考えている心を持った「誠意のない誠」の「岡 誠」のくせしやがって」

「何を。よくも言ったな」

「お前こそだ」

「そうか、そうか、「山本 孝」に、「岡 誠」だった。ありがたい。ありがたい」

先ほどは、怒りを感じたが、今は感謝の念を持ちながら、無事に、手帳に二人の名前を書き記した見習い。これ以上いたら、自分も無意味な争いに巻き込まれては大変だと、コンビニから出る。

「あっ、しまった。お茶を買うのを忘れていた」

今さら、コンビニには戻れない。仕方がないので、店の外側の自販機に向かう。お金を入れ、ガチャポンの音とともに、ペットボトルが落ちる。膝をかがめ、手を伸ばす。手に取ったペットボトルを持ち上げた瞬間、ビルとビルの隙間から空が見える。西の方角だ。何かしらのアルファベットの切れ端。

「ついに出了か、三文字目」

見習いは、空の全貌が見える場所まで走る。「目指すは、あそこの東屋だ」大きく上がったフライの白球を追う少年のように、アルファベットがはっきりと見える所まで、顔を後ろに向けて走る。走る。走る。バックで走る

「見えた」

その文字は「T」。三文字続ければ、「HAT」。

「ハット？」

と思う間もなく、足が道路の縁石にひっかかり、背中が地面に叩きつけられる。ペットボトルも同じように地面にぶつかり、見習いの手から離れ、ペットボトルコロリン、すっとなんとん、と、転がっていく。

「私のお茶が・・・」

第九章 天使へのラストステップ

誰かが、俺の足を引っ張る。そう、あのホームレスだ。まだ、いたんだ。だが、チャンス到来だ。今、空には、「L、O、V」の三文字が浮かんでいる。残りは、Eだけだ。これが揃えば、俺は見習いから卒業できる。初心者マークを外すことができる。派遣から正社員になれる。給料が出る。ボーナスがもらえる。年金だってつく。ひょっとしたら、弟子だってわんさかやってくるぞ。これがほんとのEチャンスだ。俺は、笑顔満点で足元を見つめた。

「遅くなって、ごめん。コンビニが込んでいたもんだから・・・」

「あんた、空ばかり見つめていたよ」

「そうだ、そうだ」

もう一人のホームレスも相槌を打つ。見られていたのか。まだ、まだ、俺も若い、未熟者だ。それに、仲が悪く思っていた二人だが、以外に、仲が良いみたいだ。二人は、餌を待つペットの犬や猫のように椅子に座って待っている。俺は、空に浮かぶ「E」が欲しくて、二人の前に立つ。コンビニで買った弁当を渡す。

「ありがとう」「ごぜえますだ」

二人は、礼もそこそこに、弁当の蓋を開けると、がつつき始めた。

「なあ、この弁当の蓋についている飯粒が美味しいんだよな」

「そう、そう。まずは、この飯粒をひとつ、ふたつと、はさみにくい割りばしで搦んで、口の中に入れる。少し、おかずの汁のついた味が、また、たまらなくいいんだ」

「なんだ、お前、割りばしを使うのか？俺は、この箸を使うぞ」

男が胸ポケットから、既に割られた箸を取り出した。

「おっ、エコ活動家。でも、それも割りばしだろう？」

「割られた箸だ。今、弁当についている箸は、非常用に置いておくんだ。それで、前に使った箸を使うんだ」

「大丈夫か。汚いんじゃないのか」

「大丈夫、大丈夫、大丈夫。醤油やソースおかずの汁を、まずは舌を使って、唾液で洗浄した後、水道水で洗い流し、太陽光線に当てて、殺菌消毒するわけだ。これなら、衛生上問題はない。もちろん、これを永久的に使うわけじゃない。手持ちの箸が二本になれば、自然に帰してやるんだ」

「自然に帰す？」

「ああ、土に埋めてやるんだ。土の中のバクテリアが、この箸を分解して、元の土に戻るんだ。ひょっとしたら、この箸から芽が出て、葉が開き、幹が伸び、枝を広げ、花が咲き、割りばしの実をならすかもしれないぞ。そうになると、今までみたいに、割りばし一本、お願いしますなんて、頼まなくてもよくなる」

「割りばしの木かあ。そりやあいい。早速、食事が終わったら、この箸を植えよう」

「なんだか、生きる目標が出きたぞ」

二人は、たわいもない冗談で盛り上がっている。くだらない話だが、二人の心が通じているの

は確かだ。これでは、俺の出る幕がない。折角、大金の七百円をはたいて弁当を買ってきたのに、成果がないのか。仲違っていた二人は、このノートを使うことなく、弁当だけで友人になってしまった。あと、一步のところ、で、「E」を逃してしまったのか。早くに弁当を渡し過ぎたのか。無念だ。だが、いつまでも残念がっていても仕方がない。この二人がだめならば次の獲物を探さないといけない。時間はない。ぐずぐずしてられない。

俺は、他の獲物を探しに、別の場所に移動する。目指すは、あの港の堤防の先端にある赤灯台。ガラスで作られた珍しい灯台で、夜になると、赤く点滅するらしい。そこには、暇を持て余した釣り客がいる。きっと、釣り場を巡って、争いがあるだろう。あいつが釣れて、なんで、俺が釣れないんだ、とか。俺が釣れるのは、腕がいいからだ、とか。くそっ、あいつの邪魔をしてやれ、とか。なんだ、こいつ、釣れないのは自分の技術のなさなのに、人のせいにするのか、とか。想像するだけでも、ワクワクする。俺の釣り場は、あの灯台だ。赤灯台よ、お前が俺の天使の道標だ。

だが、待てよ。俺は、天使だ。いや、天使の見習いだ。人の幸せを願うべきではないか。これじゃあ、人の不幸を待っているみたいだぞ。いや、人の不幸があるからこそ、俺たち天使の活躍の場があるんだ。そうすると、俺たち天使は、人間にとって必要悪か。必用善か。納得がいくような、いかないような。まあ、いいか。

俺は、この、数十年来から知己であるかのようにふるまっているホームレスたちに別れを告げようとした。だが、ふと、気になって、ノートを開く。ノートには、「岡 誠、山本 孝」の次に、別の見しらぬ名前が記載されていた。誰だ、俺のノートに勝手にいたずら書きをしたのは。それもいつ？疑問が浮かぶ。「岡 誠、山本 孝」の次には、「安藤 修一、玉岡 武」という名前が記されてあった。誰だ、こいつらは。俺は、名前を呼んだ。

「安藤修一くん」

返事がない。もう一度、呼ぶ。

「安藤修一くん」

「はい」

返事をしたのは、仲良く弁当を食べているホームレスの一人だった。やっぱり、そうだ。

「でも、名前を呼ぶのは、食事をすませてからにしてくれないかな」

「わるい、わるい」

だが、俺は続けて名前を呼ぶ。

「玉岡武くん」

安藤の横の男が、口をもぐもぐさせながら、箸を持った右手だけを挙げた。眼や鼻や口や体は、眼の前の弁当に集中している。やはり、この二人だ。この字は、俺の筆跡ではない。そして、二人の名前の字も、筆跡が違う。別々の人間の字だ。俺の知らない間に、俺のノートに勝手に書いたんだ。いつだ？そうだ。「V」の字を確認するために、空を見上げていた時だ。

俺は、事実関係を確認するため二人に尋ねた。仲良く、食事をしている安藤と玉岡。食足りて、友の楽しさを知る、だ。俺は、再び、空を見上げる。最初に空に浮かんだ「L」の字が薄くなってきている。もう少しで、消えそうだ。時間がない。急がないと、また、最初からのやり直

しだ。それは御免こうむりたい。

長年の友人のようなふるまいをしている、短期的な友人のふたりは、米粒ひとつはもちろんのこと、千切りよりも細かな万切りキャベツを一本も残さずに、平らげてしまった。さすがに、舌を使っての弁当箱の掃除だけは、俺がいるせいかな憚られるようだった。もう、食事を盗られるかと思って、餌を与えた飼い主にさえ、ウーウーとうなり声を発する犬の様子はなかった。俺は、おもむろに、声を掛けた。

「この字は、安藤さんと玉岡さんが書いたんだね？」

俺は、できるだけ優しく尋ねた。お腹が満たされた二人は、ぽこっとでた腹を突き出し、もっと大きくなれと、さすっている。何が生まれるんだ、お前たちに。

「ああ、そうだよ。ノートとペンが芝生に落っこちていたんで、拾ったんだ。多分、あんたのだと思って、預かってやったんだ」

安藤が答えた。

「それは、ありがとう。だけど、この名前は何だい？」

「ああ、それは、俺の名前だ。玉岡と言うのは、こいつの名前だよ」

玉岡は、楊枝が十本ぐらい入るような歯の隙間を、楊枝一本で掃除していた手を緩め、手を上げた。

「いやあ、あんたには悪いと思っていたけど、つい、ノートを開いてしまったんだ。そうしたら、他のページに名前が書いてあったので、サイン帳か何かと思って、白紙のページに名前を書いたんだ。何しろ、ホームレスになって、自分の名前なんか、十何年来、書いたことがないからなあ。何か、こう、急に、自分の名前が書きたくなって、それで、サインすると、気持ちの上で、すっきりしてね。自分が生きているという実感が湧いてくるんだよ。そうしたら、この玉岡が俺の方を見ていたので、どうだ、お前もサインしてみるかって聞いたら、俺もやってみると言ったから、ノートを渡してやったんだよ」

玉岡が歯と歯の隙間から息をスーハー、スーハーしながら、俺の方を向いている。

「安ちゃんが、何か書いていたから、俺も急に何か書きたくなって、つい、サインしたのさ。悪かったかな？」

安ちゃんか！先ほどまでは、口もきかず、視線も合すことがなかった二人なのに、今は、「ちゃん」付けで呼び合う仲になっている。やはり、このノートの力はすごい。俺が書かなくても、当事者同士、誰が書いてもいいんだことが分かった。これを販売するためには、取り扱い説明書を作る必要があるな。大天使様に報告しよう。

「いやいや、いいんだよ。安ちゃんや玉ちゃんの言うとおりの、これはサイン帳だ。サイン帳だから、できるだけ多くの人のお名前があった方がいいんだ。こちらからも礼を言うよ」

「それほどでもないよな一、玉ちゃん」

「そうだよ、安ちゃん」

中年のおっさん同士が見つめ合い、手に手を取り合う姿を目の前で見るのは気持ちがいいものではない。いや、単刀直入に言おう。気持ちが悪い。

「だけど、そのノートにサインしたせいで、急に、自分の名前をあちこちに書きたくなってしま

ったんだ。だから、ほら」

安ちゃん、いや、俺までもが、この中年コンビと仲良くなる必要はない。安藤が指差した先の東屋の柱、天井、椅子には、「安藤 修一」、「玉岡 武」の名前が、至る所に書きなぐられていた。だが、幸運にも、マジックやボールペンで書かれたものではない。公園の泥で書かれている。掃除のおじさんたちがぞうきがけすれば、きれいに落ちるだろう。

「なんか、自分の名前を書くと、妙に落ち着くんだよな。玉ちゃん」

「そうそう、安ちゃん。自分が生きているって気がするし、大げさに言えば、生きてきた証拠を未来に送れるような気がするよ」

「いいこと言うなあ。玉ちゃん」

「名前を書こうと言いだしたのは、安ちゃんの方だよ。これも、安ちゃんのおかげだよ」

「いやいや、玉ちゃんが俺の考えに同意してくれたから、この事業が広がったんだ。いつの世も、変革者は孤独だから。その孤独を、同時代に置いて、分かちあえる理解者がいるんだ。俺は、今、最高の気分だよ。玉ちゃん」

「よし、安ちゃん。これから俺たち、名前書きプロジェクトを推進し、ひきこもりや孤独に埋没している人びとを救おうじゃないか」

「いいこと言うね、玉ちゃん。俺たちにも生きがいがあったぞ。どこかの学習センターでやっている英会話やヨガなどの、単なる暇つぶし、時間つぶしの生きがいじゃなく、自らの存在価値を賭けた生きる使命だ」

さっきまで、のんびんだらりの、ぐうたら生活をしていたおっさん同士が、急に、眼から大きな星マークを飛ばしながら、熱く語り合っている。あんなら二人の夢を壊す気はないけれど、街中にいたずら書きするのはやめてくれ。

おっと、俺は、このおっさんたちの奇妙な行動に眼を奪われていて、肝心なことを忘れていた。俺の使命だ。俺が名前を書かなくても、このラブ・ノートの効力はあるんだ。と、言うことは。俺は、空を見上げた。空には、俺のプロジェクトの集大成が完結しているはずだ。太陽が昇る東の空には、太字から細字になった「L」、真ん中の口が閉じられている「O」、二本指が引っかき傷になりつつある「V」、そして、できたてほやほやの、はっきりとした「E」の字が浮かび上がっていた。続けて読めば、「LOVE」。俺はやりとげたんだ。ついに、見習い天使を脱出できる。明るい未来が待っている。愛だ。愛こそ力だ。愛こそ、人間のあいだをつなぐものだ。

「空に、何かあるのか」

俺が感極まって、空を見上げていたものだから、安ちゃんが尋ねてきた。

「おっ、何か、文字のような雲だなあ」

玉ちゃんも呟く。

「英語だ」

「L、O、V、E、ラブだ」

「へえ、自然もたまには、洒落たことするもんだねえ」

安ちゃん、玉ちゃんコンビが東の空を見上げる。俺も、もう一度確認するかのよう、空を見

上げる。背中からの夕日が俺たち三人の影を伸ばした。まるで、青春ドラマのエンディングだ。さあ、俺も、おうち、天に帰ろう。ノートをポケットにしまい、折りたたみの羽根を出し、空に飛び立とうとした。

その時、「L」の字が消え、「O」も字が消え、「V」の字が消えた。残るは「E」だけだ。それも消えるのは、時間の問題だ。俺は、慌てた。これじゃ、元の木あみだ。俺のやったことが全て水の泡だ。原因を探さないと。

俺は、もう一度、最初の振り出しの駅前に戻ろうと、飛び立った。

第十章 墮天使へのファイナルステージ

「おっ、ちょうどいい」

そのペットボトルを拾ったのは、東屋のホームレス。いや、正確には、壁はなくても、天井と屋根がある東屋に住んでいる（もちろん、施設管理者（いやに固い表現だ）の許可は得ていない）から、壁レスの男、なのだ）

「さっき、弁当を食べてばかりだから、ちょうどお茶が飲みたかったんだ。さっきの仮装行列の男は、弁当を差し入れしてくれたのはありがたいんだけど、お茶まで準備してくれていなかったからなあ。そのあたり、盲腸じゃなく、もうちょっと、気がきけばいいんだけど。あれじゃあ、いつまでたっても、芸能界どころか、下町のスターにもなれやしない。せいぜい頑張っても、ホームレス相手に弁当配って、芸を見てもらうのが関の山だろう。なあ、相棒」

男は蓋を開けると、ぐび、ぐびと二口、お茶を喉に流し込んだ。

「あっ、私のお茶が」

見習い墮天使は、倒れたまま手を伸ばすが、空を掴むのみ。ただ、黙って、男、それも、ホームレスの男が、自分のお茶を飲むのを見守るだけ。今さら、お茶を返してもらったとしても、あんな男と間接キスになるのは避けたい。飲むなら、全部飲んでしまえ、と心の中で捨て台詞を吐こうと思う間もなく、男はペットボトル半分程度飲み干すと、隣に座っているもう一人の男に手渡した。

「あっ、まさか」

先ほどは、あんなお茶なんかくれてやると思いながらも、返してもらえないんじゃないかと、かすかな、淡い期待を胸に抱いていたが、その気持ちも泡が割れて消えてしまった。まさか、二人に全部飲まれるなんて。見習いの口の中は、転んだとき入り込んだ土の味がする。その味覚を消し去るため、あのお茶が必要だったのに。もう一度、今度は、左手を伸ばす見習い。やはり、空しく、虚脱感を掴むのみであった。悲劇のヒーローのように、地面に倒れ込む見習い。その先には、東屋のベンチで、昼食後のお茶を楽しむホームレス（壁レス）の二人。

「あーあ、美味しかった」

雲がゆっくりと流れる。

「安ちゃんよ、ほら、見ろ。俺たちの気持ちを映してか、空に「H A T」と浮かんでいるよ。本当に、ほっとするな」

「ああ、玉ちゃん、確かに、食後の一杯は、気持ちを和やかにさせる。生きていて良かったなあと思わせるよ。ただ、玉ちゃんよ。空に浮かんでいる字は「はっと」で、「ほっと」じゃなか？満ち足りた時に、自然の美を感じる、「はっと」した瞬間があるということを教えてくれているんだ。ほら、あのバラ園。普段は気がつかないけれど、ちゃんと蕾がある。五月になれば、花が一杯咲き誇るだろう」

「確かにな、安ちゃん。「はっと」した瞬間に、新たなことに気がつくことはある。けど、あの空の「H A T」は、そうじゃない。誰か知らないけれど、親切な奴が俺たちに弁当やお茶を買ってくれるという、「ほっと」、つまり、温かい気持ちが誰にでもあるんだということを示してい

るんだ」

「そりゃ違うな、玉ちゃん。「HAT」では、「ほっと」と呼ばない。やっぱり、「はっと」だ。だが、玉ちゃんの言うように、優しい気持ちが込められていることは事実だ。昔、俺が小さい頃、シャンプーが苦手で、何日も髪を洗わない日があった。シャンプーをして髪を洗い流す時、お湯が目目に沁み込むのがいやだったんだ。目をつぶってあげればいいんだって？その時、目だけでなく、耳は両手で塞ぐし、口は閉ざし、鼻は呼吸を止めてしまう。まだ、ガキの俺にとって、わずかに数秒でも、息を止めることができなかつたんだ。「はい、流しますよ」と言う、ママ、そう恥ずかしい話だが、坊っちゃんの俺は母親のことをママと呼んでいた。今じゃ、ママはクソババアで、坊っちゃんは犬のクソの横で寝るホームレスだ。小さい頃に髪を洗われるとともに、栄えある未来も一緒に流れてしまったみたいだ。そんなことはどうでもいい。シャンプーの話だ。つまり、数秒でも息を止められない話だ。俺はつい息をしてしまう。すると、鼻や口から、俺の髪を洗った水が洪水のように流れてきて、俺の口の中だけじゃなく、肺までもが溺れてしまい、俺はそのまま気を失うわけだ。そんな様子を見ていた、俺の親父は、その頃は、パパだ。今は、クソジジイだ。そして、俺は、何度も自分の人生を恨み、クソッと捨て台詞を吐くホームレスだ。そのクソジジイのパパが、普段は何も言わないけれど、ある日、突然、玄関先で、「たけしくん」と呼ぶ声がする。俺は、「はい」と声を出し、仕事から帰って来たパパを迎える。「はい、たけしくん」になった俺は、玄関の扉の鍵を開ける。ドアが開く。目の前に突き出されたスーパーの袋。俺の視線は、袋を掴んだ手から、一の腕、二の腕、三の肩、四の首、そして、最後には、五の顔のパパを見る。笑っている。何だろう？お菓子かな？「ほら、シャンプーハットだ。これで、シャンプーが大好きになるぞ」俺は、気恥ずかしいような、嬉しいような複雑な気持ちだった。普段、あまり会話のなかつたパパだけど、俺のことを気にかけていてくれたんだ。「さあ、早速、使ってみるか」そう言うと、パパは浴室に向かった。俺は、すでにパジャマ姿。お風呂には入っている。だけど、パパの誘いだ。断るわけにはいかない。「わかった」と言うなり、後に続く。体を流し、湯船に入る。パパと一緒にだと、湯船からお湯が溢れる。「ほう、お前も大きくなったなあ。赤ちゃんの頃、お前をお風呂に入れていたけど、お湯が溢れることはなかつたのになあ。と、感慨深そうなパパ。そんな小さな時のことなんか、覚えていない俺。二度目の入浴なので、さっと上がり、シャンプーの準備。スーパーの袋から商品を取り出し、そのまま頭に被る。「おお、なかなか似合っているぞ」パパの絶賛の声。今から思えば、シャンプーハットが似合う人なんて、別に、かっこいいわけじゃない。でも、パパからの一言が、俺の目じゃなくて、俺の心に染みた。俺の存在が認められたんだ。そう言えば、心に染みたことなんて、あのシャンプーハット事件以来、俺の人生の中でなかつたように思う。そのハットが、今、俺の真上の空に浮かんでいるわけだ。こんな偶然な出来事はない。その思い出深い、俺の人生にとって、もっとも大切なハットをホットと呼ぶなんて、いくら親友の安ちゃんでも許せない」

「話が長すぎるんだよ、玉ちゃん。あんたの長台詞で、折角のホットした食事の後の一服が、ハット壊れちゃうじゃないか。つまり、ハットということだ」

「ちょっと待て、安藤。いくら親友でも、それは言いすぎじゃないか」

「誰が親友だ、玉岡。今さっき、名前を覚えてたぐらいで、親友面するな」

「ああ、俺も、だれがお前のことなんか親友とは思っていないよ。さっさと、この東屋から出ていけ。安藤」

「それは、こっちのセリフだ。ここは、みんなの公園だ。出て行きたければ、自分で出ていけ。玉岡」

「ふん」「ふん」

先程まで、仲良くお弁当を食べ、転がって来たお茶のペットボトルを回し飲みした安藤と玉岡だが、今では、お互いが顔を見合さないように別々の場所に移動した。安藤は、公園が見え、そのずっと先に、島と島をつなぐ橋が見え、その橋の袂に夕日が沈む西側に、玉岡はフェリーなどが出入りする港が見え、赤い太陽が昇る東側のベンチに座った。この様子を芝生に寝っ転がったまま見ていた見習いは、今だと思い、そのままの姿勢で、ポケットから手帳を取り出すと、二人が共に呼んでいた名前を記した。

「安藤と玉岡か。私は何もしていないけれど、俺の転がって行ったペットボトルの効果で喧嘩になったのだから、私が仲違いさせたのと同じことだ」

そう、勝手に解釈した。

「これで、任務完了かな」

見習いは、ようやく芝生から立ち上がると、膝や肘、胸に付いた草を払い除け、広げた手帳を持ったまま、空を見上げる。西空には、あの「H A T」。まだかまだかと、その横の空を見つめる見習い。やがて、一機のセスナが飛んできて、横に「E」という文字を描いた。「やった、これで、俺も見習いを卒業だ。あんまり気は進まなかったけれど、何事も達成すれば、それなりに嬉しいもんだ」

と喜びながらも、何でセスナ機が飛んでいるんだ。あの文字は、セスナ機が書いた文字か。この手帳の力じゃないのか。じっと手帳を見る見習い。突然、耳に墮天使の声が聞こえた。

「何をびっくりしているんだ」

「あっ、墮天使様。どちらに」

空を見上げる見習い。

「空なんて見上げて、わしの姿なんぞは、見えやせんぞ」

「じゃあ、どこに」

「お前の心の中に」

思わず胸を抑える見習い。

「ははははははは。相変わらず、素直さが抜けんようじゃなあ。そんなことでは、いつまでたっても見習いのままじゃぞ」

「はい、すみません。でも、このたびの試験なのですが、この手帳に名前を書いたら、仲のよい二人の仲を裂くことができる力があるなんて、本当ですか？」

「ははははははは。まだわからんのか、見習い。手帳にそんな力があるわけないだろう。それは、部屋の隅に落ちていた手帳だ」

その頃、街では、人類が生まれて以来の、繁栄や戦争など、愛と憎しみを描いたポリウOODの

大作「LOVE & HATE」の映画試写会の宣伝カーが街中を駆け巡っていた。

「本日、午後七時から、サンポート大ホールにて、世紀の名作「LOVE & HATE」の試写会が開催されます、先着二千名様限定です。皆様、是非、お越しください」

それに合わせて、セスナ機が「LOVE & HATE」の煙の文字を空に描くPR。会場時間まで、三時間前の午後四時にも関わらず、ハリウッドの大作であること、無料であること、暇を持て余していること、映画の内容が明らかにされていないこと、その他、エトセトラ、などなど、で、ホール前から三階までのエスカレーターには、一里の長城ほど続く行列ができていた。そこには、あの駅前のフリーペーパー配っていた女性二人、玉藻公園で公園のボランティアガイドの二人、勤務を変わってもらったのか、勤務が終了したのか、コンビニの従業員の二人、そして、東屋の壁レスの二人の姿も見られた。

第十一章 天使&墮天使

ここは、天使の部屋。

「天使様。折角、「LOVE」の四文字が東の空にかかったのですが。消えてしまいました。残念です。でも、とりあえず、四文字が揃ったのですから、私の天使への昇格はどうなるのでしょうか？」

無理やり自信あるように振る舞うものの、やっぱり自身がない見習い天使。おそるおそる尋ねる。

「見習いよ。お前は、このノート之力を信じるか？」

「はい。仲良くなった二人の名前を四組書いたら、東の空に、「LOVE」の四文字が浮かびましたから」

「ははははははは。お前も素直な奴じゃな。このノートにそんな力はない」

「でも、確かに、空には四文字が浮かびましたけれど……」

「それは、セスナ機から出されたスモークじゃ。下界で、なんかイベントをやるという噂を小耳にはさんだから、お前を試してみただけじゃ」

「はあ、そうですか……」

階段を四段まで登ったの、急に梯子を外されたかのように肩を落とす見習い。

「でも、四組を仲良くさせたのは、事実です」

胸を張る見習い。

「だが、直ぐに、喧嘩別れして、元の黙阿弥じゃ」

「はあ、そうですか」

「とにかく、お前には、まだ修行が必要じゃ。その白い服を脱げ」

「ええ、これを脱いだら、天使の世界にいらなくなります」

「そうじゃ。お前は、一度、墮天使の見習いとなれ。そこで、修行を積んで、再び、ここに戻ってこい。墮天使には、わしの方から話しておく」

「そ、そんな」

「わしに背くようだったら、天使の世界どころか、墮天使の世界にもいらなくなり、人間界に突き落とすぞ」

「そ、そ、それだけのご勘弁を」

見習い天使は、背中に白い羽がついた、つなぎの服を脱ぐと、名残惜しそうに、ゆっくりとたたむ。

「さあ、行け。見習い天使。お前が入って来たドアと反対方向のドアを出たら、墮天使の世界じゃ。頑張って、修行の成果を上げて、戻ってくるんじゃぞ。ああ、そうじゃ。墮天使の見習いの服は、後で、届けるからな」

天使への昇格どころか、墮天使の世界行きを告げられた、天使の見習い。首から足の爪先まで肩が落ちたぐらいにしょげかえり、「は、はくしょん。寒い、寒い」と呟きながらドアを出ていく。

「さあ、わしも着替えないといけないな」

大天使も、見習いと同じように、羽根が付いたつなぎの服を脱ぐと椅子の下にしまう。今度は、別の服を取りだし、被った。

「よし、準備OKじゃ」

その時、先ほど見習い天使が出て行ったドアからノックの音が。

「入れ」

「はい、墮天使様」

そこには、見習い墮天使。

「よくぞ、わしの課題をこなしたな。誉めてやる、見習い」

「いえいえ、墮天使様。私は何もしていません。人間たちが勝手に仲達しただけです。私は、それで後からノートに名前を書いただけです。もちろん、ノートにそんな力があるとは思いませんでしたけど」

「まあ、それはいい。とにかく、お前は、目標を達成したわけじゃ。それで、見習いから卒業するけれど、やはり、一人前の墮天使になるには、更に、別の修行が必要じゃ」

「別の修行とは？」

「これじゃ」

墮天使が差し出したのは、先ほど天使の見習いが脱いだ白い服。

「これは、天使の服じゃありませんか？」

「そうじゃ。だが、すぐには、天使にはなれんぞ。まずは、見習いじゃ。さあ、これを着て、天使の世界で修業じゃ。大天使には、わしから話をしておく」

墮天使の見習いは、自分が着ていた黒いつなぎを脱ぎ、名残惜しそうに畳むとその場に置いた。そして、白い見習い天使の服に着替え、

「墮天使様、大変お世話になりました。修業を積み、また、お目にかかりたいと存じます」

「いやいや、直ぐに会えるわい」

「はっ？」

「いや、お前なら、天使の見習いも直ぐに卒業できるということだ」

「はい。ありがとうございます。それでは、天使の世界で頑張ってきます」

見習い墮天使は、見習い天使として、入って来た方向と反対の扉から出て行った。墮天使の世界の扉の向こうでは、「はっ、はっ、はくしょん」の音が繰り返されている。

「ああ、忙しい。あいつも、いつまでも、あのままじゃ、可哀そうだな」

墮天使は、見習い墮天使が脱いだ黒い服を手にとった。